

国立映画アーカイブ事業

「令和6年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」

報告書

令和6年度国立映画アーカイブ 「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」報告書

目次

第1章 事業概要	03
第2章 事業報告	07
2-1 現地実態調査	
映画資料の所在に関する情報収集(概要)	08
映画資料の所在に関する情報収集(映画看板絵師三瓶勝吉氏のアトリエ)	09
映画資料の所在に関する情報収集(円谷英二ミュージアム)	12
映画資料の所在に関する情報収集(須賀川特撮アーカイブセンター)	13
映画資料の所在に関する情報収集(京都文化博物館)	17
映画資料の所在に関する情報収集(おもちゃ映画ミュージアム)	18
映画資料の所在に関する情報収集(国際放映)	21
映画資料の所在に関する情報収集(近代映画協会)	24
映画資料の所在に関する情報収集(調布市立図書館)	27
2-2 実証展示(調査に基づく資料展示)	31
2-3 デジタルアーカイブ実証研究(映画資料のデジタルアーカイブ化)	37
2-4 映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の新規連携	42
2-5 全国映画資料アーカイブサミット 2025 報告	46
第3章 事業総括	51

第 1 章 事業概要

【実施概要】

第1部:事業の目的について

本事業は、歴史的・文化的価値のある我が国の貴重な文化関係資料が散逸・消失することのないよう、アーカイブの構築に向けた資料の保存及び活用を図るための望ましい仕組みの在り方について調査研究等を行い、映画関連の非フィルム資料のアーカイブに係る中核拠点の形成を図るため、当該分野のネットワーク化を推進することにより、分野全体のアーカイブの構築・運営や共同利用の促進等を行うことを目的とする。

第2部:事業内容について

(1) 調査研究の実施

令和6年度(2024年)の調査地区は、東北地区と関西地区、関東(東京都等)地区を対象とし、非フィルム資料の所在情報及びデータベースの管理・運用・利活用等の調査研究を実施する。

① 非フィルム資料の所在に関する情報収集

I. 東北地区所在調査(現地実態調査)

地方の非フィルム資料所蔵館との連携を深めるべく調査地域を拡大し、東北地区で多数の映画資料をアーカイブしている須賀川特撮アーカイブセンター(福島県須賀川市)等を対象とする。

II. 関西地区所在調査(現地実態調査)

関西地区において、対象施設を拡大し、非フィルム資料の所在に関する情報について実地調査を行う。多数の映画資料をアーカイブしている京都文化博物館(京都府京都市)等を対象とする。

III. 関東地区所在調査(現地実態調査)

関東地区における非フィルム資料の所在に関する情報について実地調査を行う。国際放映(東京都世田谷区)等を対象に、データベースの有無も含めて所在情報の収集・調査を行う。

② 非フィルム資料の収集・保存・展示方法に関する検討

I. 映画資料のデジタルアーカイブ化による保存と利活用の検討

映画資料の保存と利活用のために、映画資料のデジタルアーカイブ化を検討する。協力所蔵施設内の映画資料の中から貴重性や劣化の状態等によって選ばれた資料を対象に、画像データを保存し、所蔵施設内でのデジタル閲覧を可能にするデジタルアーカイブ化とその方法等を検討する。

II. 実証展示開催の検討(東京都内)

利活用実証実験として、調査で発掘された資料を通じ、日本映画文化の一面を紹介する実証展示を企画して開催する(プレスリリース等の広報を含む)。関東(東京都等)地区の調査結果等を元にした資料展を通じて、資料の展示方法や資料所蔵施設同士のネットワークの推進等を検討する。

③ 所在地検索システムを活用したデジタルアーカイブの実証研究

「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」に、新規にデータベースを連携する。令和2年度の東映大森映画村・映画図書室(京都府)と松竹大谷図書館(東京都)、令和3年度の川喜多記念映画文化財団(東京都)、令和4年度の北九州市立松永文庫(福岡県)と早稲田大学演劇博物館(東京都)、令和5年度の調布市立図書館(東京都)に続いて、令和6年度は多数の映画資料を所蔵している神戸映画資料館(兵庫県)等のデータベースを候補として連携を検討する。

(2) 成果報告

調査研究の成果をとりまとめ、国立映画アーカイブへ報告するとともに、その内容を公表する。また、非フィルム資料に係る映画関係者、学識経験者、学芸員等による非フィルム資料のアーカイブ化に関するシンポジウム「全国映画資料アーカイブサミット2025」を開催し、成果を共有する。

① 全国映画資料アーカイブサミットの開催（オンライン）

令和5年度事業として実施された「全国映画資料アーカイブサミット2024」において構築された非フィルム資料に係る映画関係者、学識経験者、学芸員の昨年度からのネットワークの拡大・深化、及び提起された課題等の議論、本事業の成果の共有を目的として「全国映画資料アーカイブサミット2025」（仮称）を2024年11月～2025年2月（予定）に開催する（プレスリリース等の広報を含む）。セミナー等を実施して相互理解を深める。シンポジウムの会場は、フィジカル開催の場合は東京都内を想定する。

第3部：事業の実施体制について

本事業は、平成30年度～令和4年度文化庁事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」として実施され、令和5年度から国立映画アーカイブに移管された。平成30年度～令和4年度の5年間、委託業務として事業を実施した特定非営利活動法人映像産業振興機構（VIPO）が、事業移管後の令和5年度に続いて令和6年度も国立映画アーカイブより委託を受けて事業を運営した。

【参考】 令和5年度「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」業務内容

- ① 非フィルム資料の所在に関する情報収集
 - ・東海地区の所在調査（現地実態調査）
 - ・関東地区（練馬地区）所在調査（現地実態調査）
- ② 非フィルム資料の収集・保存・展示方法に関する検討
 - ・映画資料特別展開催（調布地区）
 - ・デジタルアーカイブ実証研究（映画資料のデジタル化）
- ③ 非フィルム資料等の“所在地情報検索システム”の管理運用及び効果検証
 - ・JFROLの管理運用及び効果検証
 - ・JFROLを活用したデジタルアーカイブ実証研究
- ④ 成果報告
 - ・「全国映画資料アーカイブサミット2024」の開催

第 2 章 事業報告

映画資料の所在に関する情報収集

○平成 30 年度～令和 5 年度

■概要

文化庁委託事業から始まり国立映画アーカイブに移管した「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」では、京都の東映太秦映画村を起点に、徐々に対象地域を拡大して全国的な映画資料の所在地情報の調査を行ってきた。散逸、消失が進行する映画資料の所在地情報の調査は、喫緊の課題であり、保存と活用を推進するための望ましいアーカイブの構築の基礎となるものである。調査地区は、関西から関東の撮影所地区に展開し、さらに撮影所地区以外の地方として、中国・九州、北海道、そして東海地区まで範囲を広げてきた。対象施設についても、映画関連会社、撮影所、現像所、資料館、俳優の顕彰館、現地ロケ作品等の映画資料のアーカイブ団体など様々である。以下が、その実績一覧である。

令和 5 年度までの調査地区・対象一覧

年度	地区	対象
平成 30	関西	①東映太秦映画村（京都）
令和元	関西	①東映太秦映画村、②神戸映画資料館（兵庫）
	関東（東京）	③松竹大谷図書館
令和 2	関東（東京・調布）	①角川大映スタジオ、②日活調布撮影所、③調布市立図書館、④調布市郷土博物館
令和 3	中国・九州	①田中絹代ぶんか館、②木暮実千代顕彰館（以上、山口）、③北九州市立松永文庫（福岡）
	関東（東京・調布）	④東映ラボ・テック、⑤東京現像所、⑥高津装飾美術、⑦調布市立図書館
令和 4	北海道	①北の映像ミュージアム、②札幌映像機材博物館
	関東（東京・世田谷）	③TOHO スタジオ、④東宝映像美術、⑤世田谷文学館
	関東（東京・調布）	⑥東京現像所
令和 5	東海	①名古屋鉄道、②名古屋市博物館、③名古屋タイムズアーカイブス委員会（以上、愛知）、④亀山市歴史博物館（三重）、⑤羽島市映画資料館（岐阜）、⑥小津安二郎松阪記念館（三重）
	関東（東京・練馬）	⑦東映東京撮影所

○令和 6 年度の実績

令和 6 年度事業の調査では、新たな地区として東北地区、関西地区、関東（東京）地区を対象とした。対象施設一覧は下記の通りで、次ページより各対象別に報告をまとめている。

令和 6 年度調査地区・対象一覧

地区	対象	所蔵資料・内容
東北（福島）	①映画看板絵師三瓶勝吉氏のアトリエ	映画看板、ポスター等
	②円谷英二ミュージアム	特撮資料アーカイブ関連
	③須賀川特撮アーカイブセンター	特撮資料等
	④ながぬまラボ	特撮資料アーカイブ関連
関西（京都）	⑤京都文化博物館	溝口健二関連資料等
	⑥おもちゃ映画ミュージアム	紙資料等
関東（東京）	⑦国際放映	賞状、新聞スクラップ等
	⑧近代映画協会	台本、トロフィー等

映画看板絵師三瓶勝吉氏のアトリエ 調査報告

■実施概要

対象施設 : 映画看板絵師三瓶勝吉氏のアトリエ
 日程 : 令和6年7月18日(木)
 同席者 : さんべいかつきち三瓶勝吉氏
 日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
 国立映画アーカイブ
 事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■映画看板絵師三瓶勝吉氏のアトリエ 基本情報

▶施設概要

所在地 : 〒963-0101 福島県郡山市安積町日出山字一本松 176-1
 TEL : 090-6458-7878 ※予約オープン制
 設立年 : 2021年

▶映画資料管理設備

- ・展示室(アトリエ)

▶データベース

- ・なし

■沿革・歴史

映画看板絵師三瓶勝吉氏が2004年から福島県石川郡平田村で運営していた三瓶氏自身の作品と昭和文化の展示施設「ミュージアム詩音真」が2011年の東日本大震災によって閉鎖し、その後2019年の台風19号が原因の阿武隈川の決壊によるコレクションの被災を経て、2021年にシネマアートアトリエミニ美術館が開館した。現在は同じアトリエを予約オープン性で公開している。

■所蔵資料概要

- ・三瓶勝吉氏が描いた映画看板
- ・映画ポスター
- ・半券
- ・その他「ミュージアム詩音真」で展示していた昭和文化関係の資料

■調査報告

かつて映画が庶民の娯楽の中心であった昭和30年代から40年代には、映画館の外に、遠くから目を引くための巨大な広告である「映画看板」が街中に多く存在した。大型印刷技術のなかった時代に職人の手で描かれた映画看板は、その独特のタッチで作品の情感や迫力を通行人に伝える役割を果たした。時代を彩った映画看板は、上映作品の交替の度に上書きされたり廃棄されたりする運命にあり、そのまま保存される例はないに等しく、また現在も映画看板を掲げている映画館はごく僅かである。今回、そうした映画看板の最盛期に職人となった三瓶勝吉氏が後年から制作を再開した映画看板を展示

している映画看板絵師三瓶勝吉氏のアトリエを調査した。

福島県郡山市では、映画館は最盛期に 11 館(日本劇場、みどり座、ロマンス座、テアトル郡山など)、看板制作会社は 120 社まで増えて、その内の 1 社が映画看板を描く工房であったという。映画看板の制作は、宣伝部のある映画館では専門スタッフが手掛け、それ以外の映画館では看板制作会社に外注していた。三瓶氏の仕事は後者の分が基本であるが、時に映画館の宣伝部で対応しきれなかったり、絵の描ける人材のいない看板制作会社が仕事を受注した場合にも声がかかったりしていたという。三瓶氏は、その当時の映画看板を記録撮影した写真をコピーしてアルバムにしている。そこに書き込まれたコメントと同氏からのヒアリングによれば、巨大なもので幅 10m 以上あった当時の映画看板で最初に描き始めるのは出演者の顔であり、皺や陰影を濃くして強烈にして、映画館の 100m 手前からでも判別できるようにしていたという。またその一つの顔をおおよそ描くのにかかる時間は僅か 30 分程度で、どんなに大きな映画看板でも 2~3 日で描き切り、1 週間で大体映画館 3 館分(1 館あたり 2 本立て + 予告 1 本 = 計 3 本分)を描いていたという。三瓶氏が 2000 年頃より制作を再開して展示している映画看板は、縮小版ではあるが、かつてと同じ手順で描かれている。

今回映画看板だけでなく、残存している映画ポスターの状況も確認した。かつての膨大なコレクションの一部とはいえ数百枚ほどあり、水没したポスターは自分の手で裏打ちしたり、消えた絵柄を自分で塗って補修したりしており、比較的きれいな状態であった。希少性の高いものとしては『レ・ミゼラブル あゝ無情』(1950 年、監督 伊藤大輔)の公開当時のポスターがあり、その他、日活や東映などの日本映画に加え、西部劇やホラーなどの外国映画のポスターなどが多くあることを確認した。

映画フィルムがかつてそうであったように、映画宣伝材料も基本的に消耗品であった。一部の愛好家がそれに文化的な価値を見出して収集することはあったが、公的機関によるアーカイブの歴史はまだ日が浅い。映画看板は残念ながら映画館でも個人でも保管が叶わず遺されてこなかった文化の一つである。

館内には、被災によって閉館したミュージアム詩音真から移送された農機具や清涼飲料水の看板なども置かれている。それは三瓶氏が、自身の創作だけでなく、映画看板の時代の文化の全体像を遺そうとしているからである。民俗・歴史学的なスケールの展示を個人で実現していた三瓶氏の熱意には脱帽である。かつて相談したものの残念ながら行政の協力は得られなかったそうであるが、地域・歴史の文化に対する公的な取り組みは重要な課題である。



館内の様子①



館内の様子②



制作中の俳優スティーブ・マックイーンの写真看板



三瓶氏自身が描いたものを含む当時の郡山市内の映画看板の写真アルバム



映画チラシ、プレス、チケット等



『レ・ミゼラブル あゝ無情』（1950年、監督 伊藤大輔）の公開当時のポスター

円谷英二ミュージアム 調査報告

■実施概要

対象施設 : 円谷英二ミュージアム
日程 : 令和6年7月19日(金)
同席者 : 西澤俊邦氏(須賀川特撮アーカイブセンター副主幹)、大野真実氏(学芸員)
日本映画史研究者/国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ
事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■円谷英二ミュージアム 基本情報

▶施設概要

設置主体 : 福島県須賀川市
所在地 : 〒962-0845 福島県須賀川市中町4-1 市民交流センターtette 5F
TEL : 0248-73-4407
設立年 : 2019年
開館時間 : 午前9時～午後5時
休館日 : 火曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始
入館料 : 無料
HP : <https://s-tette.jp/museum/index.html>

▶所蔵資料管理設備

・展示室

▶データベース

・なし

▶沿革・歴史

須賀川市出身で「特撮の神様」と称される円谷英二監督の偉業を顕彰するとともに、子どもたちに学びの大切さ、挑戦する素晴らしさを伝え、次世代に生きる人々に大きな夢を与える施設として、2019年に須賀川市民交流センターtette内に開館した。同センター内には図書館や生涯学習、市民活動のためのスペースがあり、円谷英二ミュージアムはその一部として、氏が手掛けた特撮を入り口として多様なテーマに派生して知的関心を広げる市民教育的な側面を担っている。

■所蔵資料概要

円谷英二監督が携わった作品を中心とした模型・解説等(いずれも新規作成したもの)。

■調査報告

須賀川特撮アーカイブセンターの報告とまとめて記載(P.14-16)。

須賀川特撮アーカイブセンター 調査報告

■実施概要

対象施設	：須賀川特撮アーカイブセンター
日程	：令和6年7月19日（金）
同席者	：須賀川特撮アーカイブセンター・須田元大氏(センター長)、大野真実氏(学芸員) 特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)・三好寛氏(事務局長)、 馬場裕也氏 日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏 国立映画アーカイブ 事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■須賀川特撮アーカイブセンター 基本情報

▶施設概要

設置主体	：福島県須賀川市
所在地	：〒962-0302 福島県須賀川市柱田字中地前 22 番地
TEL	：0248-94-5200
設立年	：2020年11月3日
開館時間	：午前9時～午後5時
休館日	：火曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始
入館料	：無料
HP	：https://s-tokusatsu.jp/

▶所蔵資料管理設備

- ・収蔵庫（収蔵庫の一部が見学可能）

▶データベース

- ・Excelによるデータ管理（館外非公開） ※一部資料を同館のHPにて公開している。

▶沿革・歴史

「特撮の神様」とも称される円谷英二の出身地である須賀川市が、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)とともに特撮資料を適切な環境で保存する取り組みを実施し、旧公共施設をリノベーションして2020年に開館した。

■所蔵資料概要

特撮関連の映画資料

- 映画関連書籍＝約 700 冊：特撮関係書籍(画集、写真集、論考本、絵本、ムック本等)
- 映画関連雑誌＝約 450 冊：「宇宙船」「ピークラブ」「シネフェックス」「キネマ旬報」等
- 映画美術資料＝約 12,000 点(その他未調査分あり)
- その他＝映画、ドラマフィルム(ネガ、ポジ)／未整理

(所蔵品の主な入手先＝個人からの寄贈・寄託、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構等からの寄託)

■調査報告

※須賀川特撮アーカイブセンター、円谷英二ミュージアム、ながぬまラボの調査結果としてまとめて記載。

日本で一大文化として成長し世界的にファンが広がる「特撮」(ここではミニチュアや着ぐるみ等を駆使した特殊撮影技術を指す)作品の製作本数は、90年代以降CG等の技術革新の波に押されて下降の一途をたどっていた。それまで培われてきた特撮の技術や資料が喪失の危機に晒される中で、スタッフたちは自らそれらをアーカイブして継承しようと動き始めていった。そして2012年に「館長庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見る昭和平成の技」(東京都現代美術館他)が開催され、2013年に文化庁事業の一環としてまとめられた「日本特撮に関する調査報告書」が公開され、さらに2017年には、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)が設立されたことで、アーカイブ活動が年々大きく活発化していった。

そうした特撮関係資料の保存に関して、2015年より須賀川市が特撮関係者との連携を開始し、公共施設を活用した特撮資料の保管庫が設立され、2020年より須賀川特撮アーカイブセンターが開館した。他にも2019年に開館した円谷英二ミュージアムや、元々屋内ゲートボール場のログハウスとその屋外駐車スペースだった場所を活用した「ながぬまラボ」という特撮作品を撮影可能な施設があり、同市は「特撮の神様」円谷英二監督の故郷として特撮を文化として継承するための取組を行っている。今回の調査では、特撮における映画資料のアーカイブについて調査すべく、前述の3施設(場所)を訪れた。

まず須賀川特撮アーカイブセンターの施設としての最大の特徴は、来館者がその中をガラス越しに見学できる展示室を兼ねた収蔵庫である。そこには各映画会社の撮影所や関係者等の元に残されていた資料が寄贈もしくは寄託資料として集まっており、様々な作品、大きさの特撮用のミニチュア等がライトアップされて並べられている。とりわけ全長6m程もある戦艦模型のような容易に移動できない立体物にとってはメリットのある工夫である。映画作品の収蔵資料例としては、『日本海大海戦』(1969年)で使用された「戦艦三笠」(調査・修復作業は、文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業の支援を受けて実施された)や、『瀬戸はよいとこ・花嫁観光船』(1976年)の嵐の海のシーンで使用された観光船、『トラック野郎』シリーズのトラック(第4作『～天下御免』の「コリーダ号」、第7作『～突撃一番星』の「一番星号」)、『北京原人 Who are you?』(1997年)の原始人やマンモス、『シン・仮面ライダー』(2023年)のダンプカーなどのミニチュアや雛型がある。映画会社によってはフィクションの世界を尊重して中間制作物の公開に消極的であったところもあったが、協議を重ねて、劇場公開作品、テレビ作品と段階を経て公開の了承を得た中間制作物もある。また過去の映画作品のミニチュアの一部が現在のテレビドラマや劇場公開作品の撮影に用いられたこともあり、所蔵資料は資料でありかつ現役の道具(映画美術)としても活用されている。別室では膨大な紙資料がマップケースや

中性紙箱によって保管されている。今回は美術監督渡辺明氏旧蔵資料を中心に調査した。渡辺明氏旧蔵の制作日誌は、『空の大怪獣 ラドン』（1956年）と同時期に黒澤明の『蜘蛛巣城』（1957年）が撮影されていたことが伺える貴重な資料であった。他にも渡辺明氏の特撮の現場の様子が映った写真が貼付された『日本誕生』（1959年）の写真アルバムや『獣人雪男』（1955年）の緻密な絵コンテなどを確認した。これらの資料は Excel によって目録化されているが、更に重要なことは特撮の現役スタッフの協力のもと、実際の製作過程でどのように使用されたのかが丹念に検証され調査報告がなされていることである。

以上のように積極的な収集によって散逸・消失の危機にあった資料はかなり集まった状況であるが、一方で立体物の大きさや数、紙資料の膨大さ故に、収蔵庫が既に逼迫しつつあるという課題もある。また市の施設として無料で公開しており、駅から離れた立地にもかかわらず全国各地や外国からのファンも多く訪れている状況（開館以来の累計来場者数は2024年に10万人を突破）であるが、今後財政的にどのように施設を維持していくかも課題となっている。

須賀川市では、特撮が市民活動や教育と連携している。2005年に旧長沼町と旧岩瀬村が編入したことで西に大きく拡大した須賀川市では、市全体に広がる形で特撮関連施設が存在する。市の中心街にある円谷英二ミュージアムでは、須賀川市出身の円谷英二の生い立ちを紹介するパネル、特撮スタッフを紹介するタッチパネルのデジタル展示、特撮ミニチュアや島倉二千六が背景画を描いた特撮撮影の様子ジオラマ等の展示とともに、様々な特撮のトピック毎に書籍がキュレーションされた図書館機能を有している。例えば、「特撮天文学」、「特撮寓話学」といった切り口でそれぞれの関連図書が並べられており、特撮からさらに細かく関心の枝葉を伸ばせるようになっている。

また「すかがわ特撮塾」という市内の中高生向けのワークショップでは、プロの講師の指導の元、過去に同塾に参加したOB・OGのサポートも得ながら、塾生が特撮短編映画を撮影する。ながぬまラボ旧長沼町にある文化施設。駐車場では屋外ロケ撮影も行われる)は、『シン・仮面ライダー』等様々な商業映画だけでなく「すかがわ特撮塾」の撮影にも使用されており、その際には須賀川特撮アーカイブセンターが収蔵するプロの作品で使用されたミニチュアも用いられているという。創造性や協調性を育む一般教育かつ次世代のクリエイターを生み出す人材育成は、大きな意味で特撮という文化の継承、今後のアーカイブにも繋がる動きである。

今回の特撮資料のアーカイブに関する調査は、資料そのものの収集・保存・展示状況の把握とともに、資料にまつわる文化の継承や広く社会的な意義まで考えさせられた。行政とNPO法人、民間企業との有機的な連動によって、資料を遺して活用するモノのアーカイブに留まらず、市民参加による人材育成・文化継承に繋がる動きは、アーカイブにおけるひとつの理想像といえるだろう。この特撮資料の事例を参考にして、映画資料アーカイブにおいても、その重要性を多くの人に訴求して一段と成長させてゆく方法を模索してゆかねばならない。

※下記写真は、令和6年7月19日の調査時に撮影したものであり、現在の様子と異なる場合がある。



立体物の収蔵庫内から見学用通路を
捉えた様子



紙資料類の収蔵庫の様子



円谷英二ミュージアムのパネル



美術監督渡辺明作業日誌



ながぬまラボ

京都府京都文化博物館 調査報告

■実施概要

対象施設	: 京都府京都文化博物館
日程	: 令和6年9月14日(金)
同席者	: 京都文化博物館・森脇清隆氏(映像文化創造支援センター長)、大矢敦子氏(学芸員) 日本映画史研究者/国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏 国立映画アーカイブ 事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■京都府京都文化博物館 基本情報

▶施設概要

設置主体	: 京都府
運営主体	: 公益財団法人京都文化財団
所在地	: 〒604-8183 京都府京都市中京区三条通り高倉上ル
TEL	: 075-222-0888
設立年	: 1986年 1988年開館
休館日	: 月曜(祝日の場合は翌火曜)
HP	: https://www.bunpaku.or.jp/

▶所蔵資料管理設備

- ・展示室
- ・収蔵庫

▶データベース

- ・ファイルメーカーによるデータ管理(館外非公開)

▶沿革・歴史

京都の持つ文化の伝統を基盤として新しい京都文化の創造活動を行うとともに、芸術、文化の創造活動の奨励及び育成並びに文化財の保護を通じて日本文化の中心である京都文化の豊かな創造、発展に寄与することを目的として1986年に公益財団法人京都文化財団が設立。1988年より京都府京都文化博物館が開館し、同財団が運営している。

■調査結果

今回の調査では、京都文化博物館が所蔵する溝口健二(2026年に没後70年を迎える)に関連した資料の概要を確認した。溝口健二作品に参加したスタッフが遺した坂根田鶴子(映画監督、脚本家)や内藤昭(美術監督)旧蔵の資料が、同館に寄贈されている。特に前者の資料は溝口作品と自身の監督作に関わる製作資料と、その他の私信類等が膨大にある。従って今後また調査を検討してゆきたい。

おもちゃ映画ミュージアム 調査報告

■実施概要

対象施設 : おもちゃ映画ミュージアム
日程 : 令和6年9月17日(月)、18日(火)
同席者 : おもちゃ映画ミュージアム・太田米男氏(代表)、太田文代氏
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■おもちゃ映画ミュージアム 基本情報

※以下概要情報は、調査時の情報。2025年4月より移転して運営予定(移転先：〒602-8227 京都市上京区黒門通元誓願寺下ル毘沙門町 758)

▶施設概要

設置主体 : 太田米男(代表)
所在地 : 〒604-8805 京都府京都市中京区壬生馬場町 29-1
TEL : 0248-94-5200
設立年 : 2015年5月18日
開館時間 : 10:30～17:00
休館日 : 祝日含め月曜、火曜
入館料 : 高校生・大人…500円、中学生…300円、小学生以下…無料
HP : <https://toyfilm-museum.jp/>

▶所蔵資料管理設備

・展示室

▶データベース

・一部 Excel によるデータ管理(館外非公開)

▶沿革・歴史

長年にわたる映画研究や映画祭活動、玩具映画復元プロジェクトの活動を進めてきた太田米男氏が、映画のまち・京都にこそ映画のアーカイブ施設が必要という思いと、光学玩具、玩具映写機を活かしてより多くの人たちに映画の歴史と楽しさを伝えたいという思いから、一般社団法人京都映画芸術文化研究所を設立し、2015年に「おもちゃ映画ミュージアム」を開館した。

■所蔵資料概要

・映画関連機材 約 200 点：撮影機、映写機、光学玩具、幻燈機
・その他：16mm フィルム、パテ・ベビー(9.5mm)フィルム 500 本／立体写真ステレオスコープ(未整理)／日本映画コマ画像(未整理)／各種ガラス種板(未整理)／各種紙資料(映画ポスター、脚本、制作資料等)

■調査報告

おもちゃ映画ミュージアムの名称にも冠されている「玩具映画」の機材やフィルムの収集・復元・研究・活用と、映画前史の光学玩具などのコレクションに関しては、ホームページにもその成果が広く公開されており、今更触れるまでもないが、今回はミュージアム移転作業の大変な時期に特段の便宜をはかっていただき、従来あまり目に触れてこなかった、主に紙資料を中心とした収蔵品の調査を行った。

特色の第一に挙げられるのは、ミュージアム代表の太田米男氏がかつて大映京都撮影所(倒産後)において撮影監督の宮川一夫や森田富士郎のもとで仕事をしていた関係で保存されたものである。1971年の大映倒産以後、資料が散逸の危機にある中で、極めて重要な撮影に関する資料が収集された。イーストマン・カラーの大映第1回作品『地獄門』(1953年、監督 衣笠貞之助、撮影 杉山公平)の全ショットの撮影データが記録された5冊のスクラップブックには、各ショットの白黒紙焼き写真が添付され、ラッシュと思われるカラーポジ・フィルムもホッチキス留めされており、「大映技術研究所」の蔵書印が押されている。『大魔神怒る』(1966年、監督 三隅研次、特技監督 黒田義之、撮影 森田富士郎)の香盤と絵コンテは、青焼きとはいえ、書き込みもあり、オープンセットのプールで撮影されたことなど、撮影の実際が検証できる資料である。そして「合成作画の第一人者」といわれる渡辺善夫らの特撮合成用マット画が30枚以上、きれいな状態で保管されている。渡辺は戦前の東宝で円谷英二率いる特殊効果係に所属して以降、合成作画を担当し、1950年代にフリーとなって主に大映の特撮映画を手掛けてきた。残されているのはシネマスコープサイズのもので、『釈迦』(1961年)や「大魔神」3作(1966年、大魔神の赤い顔が特徴的)、『鉄砲伝来記』(1968年)など特撮が重視された作品だけでなく、一般作品の都会の夜景や星空などもあり、作品の特定には今後の専門家による調査が待たれる。作画合成という手法はオプティカル・プリンターを使った現像時のものではなく、撮影時にフィルムを巻き戻してカメラ内で行われるため、作画には精密な筆致が要求されるが、現在残されているマット画は思った以上に小型のものでその精緻さは驚異的である。また特撮合成用に使用された35mmのサイレント・ベル&ハウエル撮影機(モデルB型)も一緒に保管されている(おもちゃ映画ミュージアムでは2011年に「大映京都の特撮技術『画合成』原画展」が開催された)。

その他、記録映画作家の松川八洲雄の『琵琶湖 長浜 曳山まつり』(1985年、ポーラ伝統文化振興財団企画、英映画社製作)の製作資料のスクラップブックがある。このスクラップブックは監督自身が作成したもので、撮影の過程や記録映画には珍しい絵コンテなども含まれており、「映像のアルチザン」といわれた松川の創作の秘密が垣間見える。国立映画アーカイブにはまとめて「松川八洲雄資料」が所蔵されているが、その欠落を埋める意味でも重要であり、各資料館の所在情報を共有することで分散する作家資料をまとまりをもって把握するという本事業の意義にも適っている。

さらに1950年代の京都の映画館看板を撮影した白黒写真のスクラップブック(『カルメン故郷に帰る』、『君の名は』、『花の生涯』、『お茶漬の味』など京都松竹座ほか)、「大正14年日本映画劇場用チラシ」と書かれた映画館プログラムのファイル(京都新京極・帝国館など)、京都松竹座の映画館プログラムのファイル(上山草人の挨拶状、松竹楽劇レビュー「上山草人のモンゴールの王子」の紙製の宣伝用ペナントほか)などもあり、近年、活用の高まりを見せている各地の映画館文化を調査する上での貴重な資料となっている。また愛好家から寄贈された「懐かし昭和ブロマイド 女優/男優」ファイルなども閲覧することができた。



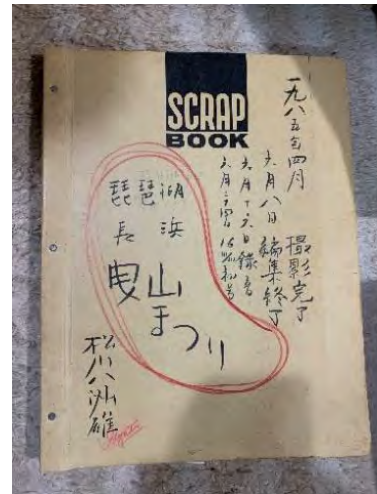
『地獄門』(1953年)
撮影記録



『大魔神怒る』(1966年)の
香盤と絵コンテ



『大魔神怒る』(1966年)
特撮合成用マット画



松川八洲雄『琵琶湖長浜曳山
まつり』(1985年)製作資料



1950年代の京都の映画館
看板を撮影した白黒写真
のスクラップブック



松竹楽劇レビュー「上山草
人のモンゴールの王子」の
紙製の宣伝用ペナント

国際放映株式会社 調査報告

■実施概要

対象施設 : 国際放映株式会社
 日程 : 令和6年5月28日(火)、7月16日(火)、8月8日(木)
 同席者 : 国際放映株式会社・皆川修氏、田村麻美氏、雪野絵美氏、佐藤毅氏
 日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
 国立映画アーカイブ
 事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■国際放映株式会社 基本情報

▶概要

所在地 : 〒157-0073 東京都世田谷区砧 5-7-1 東京メディアシティ
 TEL : 03-3749-7213(総務部)
 設立年 : 1948年

▶沿革・歴史

1946年の東宝争議をきっかけに誕生した東宝第二撮影所を母体にして、1947年に創立した新東宝映画製作所が、1948年に株式会社新東宝となる。その後1958年に新東宝株式会社に商号変更。経営が悪化した1961年に映画製作部門から撤退する。そして各業務部門が分社化し、清算会社としての新東宝が製作部門を担ったNAC(ニッポン・アートフィルム・カンパニー)を吸収する形で、テレビ番組を制作する国際放映株式会社と改称し、現在にいたっている。現在7つのテレビスタジオから成る「東京メディアシティ(TMC)」を擁するスタジオ経営と、映画・テレビ番組の企画製作を行っている。

■所蔵資料概要

・ポスター、プレス、英文パンフレット、写真アルバム、新聞スクラップブック、合本脚本、映画雑誌等

■調査報告

国際放映の本社及び別置倉庫に保管されている新東宝時代の映画資料を調査した。その内訳は、ポスター、プレス、英文パンフレット、写真アルバム、新聞スクラップブック、合本脚本、映画雑誌等、多岐にわたる。新東宝で映画製作を行っていた期間は1947年から61年の足掛け15年だが、1961年に経営の悪化から清算会社も含め三社に分かれるという激変期を経験し、資料の散逸を余儀なくされたが、現在、ポスターやプレスなどの宣伝材料を中心に再収集の努力を継続して行い、社内アーカイブは充実している。ちなみに現在の国際放映の見解としては、1961年に「映画製作から撤退」と表現しており、従来「倒産」や「解散」などの表記は総合的に判断して必ずしも正確ではないとしている。

以下、個別の資料を見ていくと、ポスターに関しては約400種がリスト化されている。非公式ウェブサイト「新東宝データベース1947-1962」には再映作品や配給された外国作品を除いて771本が登録されており、単純にポスターの種別を作品数に換算することはできないとしても、およそ半数近い作品のポスターが収集されているとみていい。『夢よもういちど』(1949年)、『次郎物語』(1955年)、『鬼姫競艶録』(1956年)、『肉体の野獣』(1960年)など封切時のオリジナル・ポスターについては国

立映画アーカイブにも所蔵されていない作品も多く、そのほか後年に再映した際の「三共映画社」配給版ポスターも確認できた。

海外向けのプレスやパンフレットからは、英文の『人間魚雷回天』(1955年)、『東海道四谷怪談』(1959年)、フランス語の『恋文』(1953年、表紙は小杉放庵の日本画)、『女の暦』(1954年)、ドイツ語の『草を刈る娘』(1953年)などがあり、多岐にわたって積極的に海外セールスが行われていたことも裏付けられた。それと関連したことでいえば、『煙突の見える場所』(1953年)がベルリン国際映画祭で「ベルリン市政府特別賞」を受賞した賞状が大切に保存されていたことである。この賞は当時のマスコミや以降の映画史で「国際平和賞」と表記されていたが、現物資料で正しい名称が明らかとなった。

写真資料に関しては、今回は宣伝スチルの調査は行わなかったが、複数の写真アルバムを確認した。1955年のアルバムには渡辺邦男と星野和平が取締役になった時の記念写真や大蔵貢が社長に就任した時の挨拶写真があり、製作部作成の「記念撮影」と題されたアルバムには『長脇差大名』(1955年)、『軍神山本元帥と連合艦隊』(1956年)、『明治天皇と日露大戦争』(1957年)などの完成記念の集合写真が貼り込まれていた。さらに「株式会社 NAC 創立披露パーティ」(1962年1月23日、銀座東急ホテル)の写真アルバムや、東京メディアシティへのリニューアルに向けて1990年に旧来の新東宝時代からのステージを解体した際の写真アルバムには、第五ステージ(現在も稼働)のみを残して、その他のステージは全て取り壊され、またこの時まで所内に時代劇オープンが機能していたことも見て取れた。また新東宝時代にガラス乾板作成を請け負っていた永嶋写真工芸社(のちにエヌ・フォトに改称)が閉鎖される際に買い戻していたり、新東宝で製作主任を務めていた奥原徳太郎が所有していた秘蔵の写真スクラップを引き継いでいたりしており、第一撮影所や第二撮影所の航空写真など重要度の高い写真はデジタル化されていることも判明した。

新聞や雑誌、業界通信の切抜スクラップブックは、当時の総務課などが作成したもので1950年から1961年にかけて17冊余りが残されており、1955年の「渡辺・星野両氏就任」、1960年の「高倉事件」(俳優の高倉みゆきの契約トラブル)などトピックごとにまとめられていたものもある。なかでも1955年末の大蔵貢社長就任以後は「社長記事」の分量が増え、多くの出版メディアを賑わしたことが手に取るようにわかった。さらに新東宝末期の救済策として日活や東映などと合併を画策したことや、労働組合との攻防、分社化の際の混乱の様子などが当時のメディアの受け取り方も含めて記録された貴重なものであった。

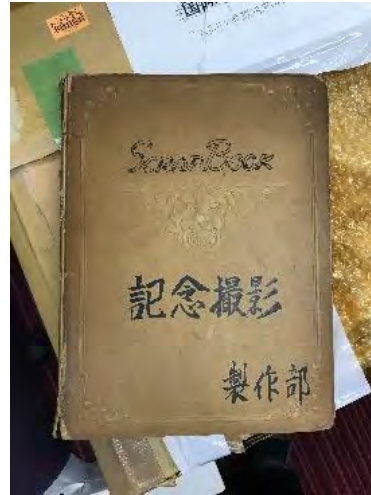
撮影台本に関しては「保存台本」として合本されており、1949年の合本番号3号から1961年の68号まで(1、2、37、40号は欠落)、64冊が保管されていた。台本の表紙に「SHIN 東宝企画部ぞうしょ」、「新東宝渉外課」、「新東宝企画本部保存用」、「新東宝芸文室蔵書」、「映倫提出用完成台本」など印や記載があることからわかるように各部署から保存用に集られたもので、バージョンも初稿や改訂稿、完成台本とまちまちで、書き込みなどはほぼ見られなかった。

書籍に関しては『映画年鑑』が保存されているのは映画会社として当然であるとしても、雑誌『キネマ旬報』が1923年(第141号以降)から1960年にかけてきれいに合本されて保管されていることには、正直に言って驚かされるものがあった。「新東宝調査室蔵書」と蔵書印が押され、関東大震災以前の大正期からまとめて収書されているということは、「業界の羅針盤」といわれた『キネマ旬報』を揃いで持っていなければならないとする、会社の品格のようなものさえ感じられた。

その他、昨年亡くなった山際永三監督の旧蔵台本(主に助監督時代のもの)や、国際放映時代のテレビドラマの代表作『西遊記』(1978-79年)の写真アルバムが保管されていたことも付記しておく。



『煙突の見える場所』(1953年)
ベルリン国際映画祭
「ベルリン市政府特別賞」賞状



アルバム「記念撮影」(製作部作成)



新聞スクラップ「渡辺・星野両氏就任」(1955年)



保存台本(表紙に「SHIN 東宝企画部ぞうしょ」)

う



雑誌『キネマ旬報』
(1923年、第141号)



山際永三監督の旧蔵台本
(主に助監督時代のもの)

株式会社近代映画協会 調査報告

■実施概要

対象施設 : 株式会社近代映画協会
日程 : 令和6年7月31日(水)、10月2日(水)
同席者 : 株式会社近代映画協会・新藤次郎氏(代表取締役)
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ
事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■株式会社近代映画協会 基本情報

▶施設概要

所在地 : 東京都千代田区神田神保町 2-36-2 片桐ビル 4 F

TEL : 03(6261)3101

設立年 : 1950年7月31日

▶沿革・歴史

1947年の『安城家の舞踏会』以来松竹で脚本家・監督のコンビを組んでいた新藤兼人と吉村公三郎は、1949年に2人が手掛けた作品の興行的不振により会社からコンビ解消を迫られたことで、1950年3月に退社。そこに独立の噂を聞きつけた松竹京都撮影所の映画プロデューサーの絲屋寿雄、松竹に所属していた俳優の殿山泰司、そして第一協団の山田典吾らが加わり、この5人で同年7月に独立プロダクションである近代映画協会株式会社を設立した。以来、自由な創造活動を追求した同社は、野心的で社会性の強い作品を多く生んできた。現在は、新藤兼人の子息の新藤次郎が社長を引き継いでいる。

■所蔵資料概要

- ・脚本(映画、テレビドラマ) : 500冊以上
- ・トロフィー等 : 約30点
- ・その他 : ポスター他

■調査報告

1950年に創立され今年で75年を迎える近代映画協会の本社オフィスに保管されている500冊以上に及ぶ台本と、国際映画祭受賞トロフィーなどの記念品約30点を調査した。台本の内訳は映画作品が約300冊、テレビ番組(ドラマとドキュメンタリー)が約200冊である。映画作品は近代映画協会製作の作品(自主製作に提携作品を含む)が中心だが、他の独立プロ作品も含まれており、さらに脚本家として新藤兼人が執筆したメジャー系作品も多数保存されていた。主に映画化された作品が多いものの、未映画化作品も含まれている。台本の表紙に新藤兼人や吉村公三郎、絲屋寿雄、能登節雄への宛名書きがあるものがあり、「保存用」と書かれた印が押されていることから、会社として幅広い関連作品の台本を保存していこうとする明確な意図が働いていたことがわかった。また撮影台本に手書きで加筆修正を加え「完成台本」と但し書きがあるものもあり、保存用台本はあくまで完成した作品に即したものが求められていたことも確認できた。完成台本作成の作業は主にスクリプターが担っていたと思われる。

今回の調査は短時間で行ったので簡易的なリストしか作成できなかったが、その主な作品を挙げると、近代映画協会設立の契機となった作品「肉体の盛装」がある。表紙には「東宝・近代映画協会提携第一回作品」とあり、1950年に山田五十鈴主演で撮影が開始されたが、東宝で発生したストライキの影響を受け、やむなく製作中止に追い込まれた。台本には当時のスタッフや俳優の名前が手書きで記されている。この作品は翌年、京マチ子主演により大映で『偽れる盛装』として完成した。自主製作の第1作『原爆の子』(1952年)は修正が施された完成台本で、文芸大作の『夜明け前』(1953年)は準備用台本と映倫提出用の完成台本がある。近代映画協会が再起するきっかけとなった記念碑的作品『裸の島』(1960年)に関しては、その準備期間に広島県三原市でロケが行われた教育映画『らくがき黒板』(1959年)の台本も残されていた。合宿による集団製作が行われた『母』(1963年)、『悪党』(1965年)、『本能』(1966年)、『性の起原』(1967年)などは、台本と共に新藤兼人による「撮影日記」(台本と同じ冊子体)も確認できた。「撮影日記」は『新藤兼人の映画 著作集』(全4巻、ポリエ企画、1970-71年)などに収録されているが、関係者に配られた現物を見ることができた意義は大きい。劇映画以外にも初期の記録映画『尖石遺跡』(第3稿)と『蓼科の四季』(第5稿、製作年は共に1966年)があり、『本能』と並行して撮影された『蓼科の四季』はスクriptターの城田孝子を使用したもので、ダビング表などの製作資料も含まれていた。さらに近代映画協会から巣立っていった監督の窪川健造(『手をつないで』1960年ほか)、安作郎(『大地』1970年ほか)、神山征二郎(『二つのハーモニカ』1976年ほか)、千葉茂樹(『アウシュビッツ 愛の奇跡 コルベ神父の生涯』1981年ほか)、小松崎和男(『三本足のアロー』1980年ほか)らの作品もあった。

他社作品でいえば、現代ぷろの『真昼の暗黒』(1956年、監督 今井正、脚本 橋本忍)の初稿と思われる台本のタイトルが「罪と罰」だったことや、東映の『裸の太陽』(1958年、監督 家城巳代治、脚本 新藤兼人)の最初の題名が「上り勾配」であったこと、また日活の『海の野郎ども』(1957年、監督・脚本 新藤兼人)が当初は近代映画協会作品「海の争い」として企画されたこと、『サヨナラ COLOR』(2005年、監督 竹中直人、脚本 馬場当)の初稿「ミセス「洋燈」へ」なども確認でき、映画史的に興味深い事象を知ることができた。

新藤兼人という創作エネルギーの固まりのような存在の内実に触れる資料としては、『鬼婆』(1964年)、『さくら隊散る』(1988年)、『冨』(2004年)などの新藤本人による直筆原稿がある。これらは主にシナリオ作家協会の200字詰原稿用紙(ペラといわれる)に鉛筆で一気に流れるように書かれたもので、なかでも未映画化作品「ヒロシマ」の原稿が目を惹く。2003年頃に執筆され最期まで実現にこだわった作品で、原爆投下後、一秒二秒三秒の間に何万もの人々が殺戮された瞬間を再現する鬼気迫る作品であった(第1稿は『新藤兼人・原爆を撮る』2005年、新日本出版社に収録)。

今回の調査では、今まであまり取りあげられてこなかった、近代映画協会がテレビ業界に果たした役割の大きさが浮き彫りになった。テレビ興隆期の作品『家族』(日本テレビ、1960年、脚本 新藤兼人、演出 津田昭、但し放映題名不詳)、『東芝日曜劇場 おんな』(ラジオ東京[現 TBS]、1960年、脚本 新藤兼人、演出 石川甫、但し放映題名不詳)、『テレビ指定席 恐山宿坊』(NHK、1964年、脚本 新藤兼人、演出 吉田直哉、セット撮影は国際放映のスタジオ[テレビドラマデータベースによる])などを始めとして、1970年には東京12チャンネル(日経映画社と共同)で『新藤兼人劇場』(4話13回)が放送されたが、「第二話 誘惑」(全4回、原作 新藤兼人、脚本 勝目貴久・千葉茂樹・原功・松田昭三、監督 吉村公三郎・原功・末松茂、主演 乙羽信子)の台本が確認できた。さらに1977年にテレビ朝日で始まった「土曜ワイド劇場」以降のいわゆる「2時間サスペンス」の制作に果たした貢献がある。「土曜ワイド劇場」では『恐怖の大渦巻』(1978年、脚本 新藤兼人、監督 齋藤武市)、『息子殺し』(1981年、脚本 新藤兼人、監督 齋藤武市)、『美人デザイナー殺し』(1993年、脚本 新藤兼人・石倉保志、監督 山本

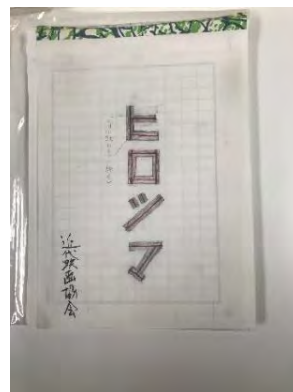
迪夫)、テレビ朝日「月曜ワイド劇場」では『妻はついに浮気宣言』(1985年、脚本 新藤兼人、監督 渡邊祐介)、『妻はなぜ反乱したか』(1986年、脚本 新藤兼人、監督 瀬川昌治)、日本テレビ「火曜サスペンス劇場」では『浅見光彦ミステリー 平家伝説殺人事件』(1987年、脚本 岡本克己、監督 藤井克彦)、『朝比奈周平ミステリー 出雲路殺人事件』(1991年、脚本 岡本克己、監督 出目昌伸)、よみうりテレビ「木曜ゴールデンドラマ」では『妻のしあわせ』(1989年、脚本 森崎東、監督 加藤彰)、フジテレビ「金曜エンタテイメント」では『山村美紗サスペンス 京都紫野殺人事件』(1994年、脚本 井上由美子、監督 澤田幸弘)など各局に満遍なく作品を提供していたが、ここに挙げたわずかな例からも明らかとなり、その特徴は積極的に映画監督を起用したことにある。劇場用映画の製作が困難さを増す映像業界にあって、撮影所システムの中で長年培われた映画監督の伎倆が大いに発揮されることとなった。そのほか近代映画協会ならではのユニークな作品として、佐藤慶が永井荷風を演じたドキュメンタリー・ドラマ『昭和二十年八月十五日 終戦日の荷風と潤一郎』(テレビ朝日、1984年、脚本 新藤兼人、監督 森崎東、監修 松本清張)、乙羽信子の「どろんこ半生記」を原作に斉藤由貴が乙羽に扮した『女優時代』(よみうりテレビ、1988年、脚本 新藤兼人、演出 大森一樹)、澤井信一郎の映画版に次ぐ『野菊の墓』(テレビ東京、1993年、脚本 新藤兼人、監督 神山征二郎)は乙羽信子が出演した最後のテレビドラマであった。



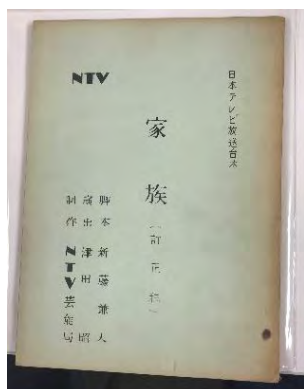
台本『肉体の盛装』
(未映画化、脚本 新藤兼人)



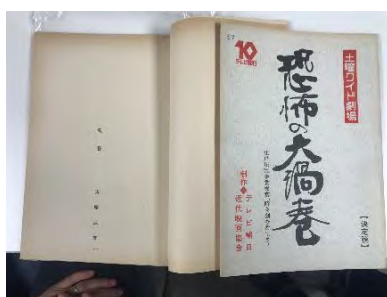
台本『蓼科の四季』
(1966年)



原稿『ヒロシマ』
(未映画化、脚本 新藤兼人)



台本『家族』
(日本テレビ、1960年、
脚本 新藤兼人、演出 津田
昭、但し放映題名不詳)



台本『恐怖の大渦巻』
(1978年、脚本 新藤兼人、
監督 齋藤武市)



台本『昭和二十年八月十五日
終戦日の荷風と潤一郎』(テレ
ビ朝日、1984年、脚本 新藤兼
人、監督 森崎東、監修 松本清
張)

調布市立図書館 調査報告

■実施概要

対象施設 : 調布市立図書館
 日程 : 令和6年6月11日(火)、11月19日(火)、12月10日(火)
 同席者 : 調布市立図書館・須川綾子氏
 日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
 国立映画アーカイブ
 事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■調布市立図書館 基本情報

▶施設概要

所在地 : 〒182-0026 東京都調布市小島町2丁目33-1
 TEL : 042-441-6181
 設立年 : 1966年

▶施設概要

- ・映画資料室(文化会館たづくり5階)
- ・書庫: 地下収蔵庫、外部収蔵庫(高架下資料保存庫)

▶データベース/所蔵資料

※令和2年度報告書(調査)及び令和5年度報告書(JFROL)をご参照ください。

■調査報告

調布市立図書館にある新東宝関係の映画資料のうち、今回は今年度新規に収蔵したスク립ターの鈴木伸(鈴木ノブ)旧蔵台本と、以前から収蔵されていた録音技師の古山恒夫旧蔵台本を調査した。

鈴木伸は『アサヒグラフ』1952年4月16日号に掲載された顔写真入りの「スク립トガール告知板」によれば、女学校を卒業後、13年前(1939年)に監督志望で撮影所(東宝)に入り、1952年現在で就いた作品は約70本、代表作は共に1950年の阿部豊監督『細雪』、小津安二郎監督『宗方姉妹』、溝口健二監督『雪夫人絵図』など文芸大作であると記されている。遺族から寄贈された台本は1939年から54年にかけての22冊。彼女の正確な職歴はわからないが、残された資料から推定すると1939年に東宝撮影所に入社し、1947年に東宝争議のあおりで誕生した新東宝映画製作所に移り、その後、小津安二郎の宝塚映画作品『小早川家の秋』(1961年)に就いているため、いずれかの時期に東宝系の会社に移動したと考えられる。この時期の映画のクレジットにはメインスタッフやその助手までしか記載されず、スク립ターとして名前が載ることは稀で、事実クレジット情報を網羅的に採録した「新東宝データベース 1947-1962」でも「鈴木伸」の担当作品は伊藤大輔監督の『明治一代女』(1955年)と小森白監督の『天皇・皇后と日清戦争』(1958年)の2作品のみである(ちなみに国立映画アーカイブの「所蔵映画フィルム検索システム」でも該当作は『明治一代女』のみ)。このような状況で今回のように本人の旧蔵資料を(担当作品を網羅していないとはいえ)確認できたことは極めて重要なことといわなければならない。

具体的に作品を見てゆくと、まず1939年の東宝作品『若い仲間』（監督佐藤武）は、表紙に「No.1」とあることからスクリプターとして就いた最初の作品と思われる。書き込みはシーンごとに、撮影日、セットやロケなどの別、ロケ場所（田園調布、若林、高島屋など）、ショットサイズ、秒数、台詞の修正、省略場面（omit）の指示などが細かく記されており、特にカメラ・ポジションがわかるように平面図のメモ書きが多いのは、ショットのつながりを理解するためのものだろう。『若い仲間』の物語は若い女性が主人公で、リベラルな家庭の中でも生きづらさを感じる女性の感覚が瑞々しく描かれていることを考えると、最初の作品に向う鈴木への躍動感が伝わってくるようだ。1947年の斎藤寅次郎監督の『浮世も天国』は採録台本であり、スクリプターが完成台本作成に関わったことを裏付けるものだが、現在この作品は現存が確認されておらず、そうした意味でも完成作品を採録したこの台本は貴重である。その他の鈴木への担当作品は『天の夕顔』（1948年、監督阿部豊）、『夢よもういちど』（1949年、監督野村浩将）、『銀座化粧』（1951年、監督成瀬巳喜男）、『覗かれた足』（1951年、監督阿部豊、台本名は「靴」）、『銀二郎の片腕』（1953年、監督青柳信雄）などで、『宗方姉妹』（1950年、監督小津安二郎）の台本はあるものの残念ながら書き込みなどはない。また『トラン・ブルー 月の光』（1954年、監督松林宗恵）は「SCRIPTS」と印刷されたスクリプト用紙が20枚ほど残っている。鈴木と東宝での同期入社のスクリプター城田孝子のインタビュー（城田孝子、廣澤榮「スクリプターの四七年」『講座日本映画 5 戦後映画の展開』（岩波書店、1987年））では、聞き手の廣澤榮が鈴木への印象を「削った鉛筆を沢山自分の髪の中に差していたな、まるで花魁の簪みたいに、あれはまことにユニークなスタイルでしたが…鉛筆を削るひまもないくらいに映像を捉えようとしている姿なんですね」と述べているが、さらに重要なことはこのインタビューに掲載されているスクリプト・シートが今回残っていたものと同じだということである。このインタビューによればハリウッド帰りのカメラマン三村明が持って来たものを本多猪四郎や黒澤明が日本的に使いやすく改良したのだという。つまり東宝から新東宝に移籍した鈴木伸が使っていたスクリプト・シートも東宝由来のものであるということが出来る。その他、鈴木旧蔵の台本は必ずしも鈴木への担当作品ではないものも含まれている。その理由は定かでないものの、先輩の高松富久子が担当した『緑の故郷』（1946年、監督渡辺邦男）、同僚の菱田和子が担当した『おかあさん』（1952年、監督成瀬巳喜男）、同じく森栄が担当した『もぐら横丁』（1953年、監督清水宏）などもあり、特に高松は早撮りで定評のある渡辺監督の信頼が厚かった人物で、のちに東映の沢島忠監督と結婚し「鷹沢和善」の共同ペンネームで脚本を手掛けたことでも有名である。恐らく記録を取る際の参考にしたものと思われる。ほか『石中先生行状記 青春無銭旅行』（1954年、監督中川信夫）の中に挟まれていた資料に「長田様 特撮分」と書かれた2枚のメモ書きがある。罫紙に「本篇 NO./特撮ボード NO./摘要/図柄」の項目が書かれ、メレオン島やロ号などの記載や、潜水艦のイラストもあることから『潜水艦ろ号未だ浮上せず』（1954年、監督野村浩将）の特撮場面の抜き書きと推定され、「長田様」は編集の長田新（永田伸）と考えられる。

録音技師の古山恒夫（1925-2004年）は『キューポラのある街』（1962年）、『にっぽん昆虫記』（1963年）、『戦争と人間』三部作（1970-73年）など日活を代表する作品で評価の高い技術者であり、調布市立図書館には日活やその後のテレビ作品も含め古山が担当したほぼ全ての台本が寄贈されているが、今回は彼が録音助手を務めていた新東宝時代の50作品に限って再調査を行った。古山は工業専門学校を卒業した1947年、新東宝映画製作所が設立した年に録音課に入社、第1回作品『かけ出し時代』（1947年、監督佐伯清、録音鈴木勇）に就いた。台本には「入社第一回作品/昭和22年5月4日撮影開始7月2日完成試写」と書き込みがあり、製作スタッフの録音助手の欄に「根岸寿夫、阿部諒、古山恒夫、木村実/Recorder 竹口一雄、河西徳治」と細かく記載されている。このことから明らかなように、古山は自身の就いた作品を年ごとに番号を付し整理していた。第4回作品『馬車物語』（1948年、

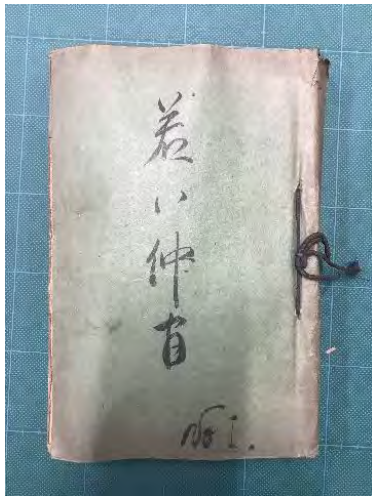
監督 中川信夫、録音 中井喜八郎)には、場面割りの冒頭に L=ロケ、S=セット、SP=スクリーン・プロセス、D=昼、N=夜などの略記号の説明が書き込まれ、本文の丁寧な書き込みに加え、巻末余白には C=大写、B=半身、M=七分身、F=全身、L=遠景とショットサイズを説明する人物のイラストが書き込まれている。『小原庄助さん』(1949年、監督 清水宏、録音 中井喜八郎)では「大泉 RCA 使用」と書かれており、ダビングに太泉スタジオが使われていたことが裏付けできる。この時期、新東宝社長の佐生正三郎は太泉スタジオの重役も兼務しており、製作能率を上げるため新東宝撮影所(ダビングステージは第二撮影所のみ)以外でも作業が行われていた。五所平之助監督のスタジオ・エイト・プロ作品『わかれ雲』(1951年)もアフレコには太泉スタジオが使用された。ほか『彌太郎笠』(1952年、監督 マキノ雅弘、録音 神谷正和)では松竹下加茂撮影所でセット撮影が行なわれたことなど、具体的な製作過程がつぶさに記録されている。

『銀座化粧』(1951年、監督 成瀬巳喜男、録音 神谷正和)には付属資料として「アフ・ダブロール表」(他社ではダビング表、DB 表などという)があり、台本の巻末余白にはその下書きも記されていることから、助手の古山がダビング表を作成していた役割分担も推定できる。その他、音声のみを別録りする「サウンド・オンリー」の記録や、借用機材一覧表、使用フィルム一覧表などが各々の台本に精密に記録されており、映画技術史を具体的に研究する可能性に満ちている。これらの書き込み台本を詳細に見てゆくと、単に録音部のみの技術的な事柄ではなく、演出と密接に関わりあった映画表現の創造に踏み込んだ、ダイナミックな分析さえ可能だと思えてくる。

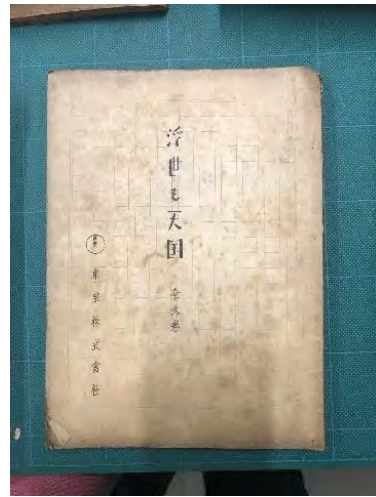
また古山が使用した台本は『グッドバイ』(1949年、監督 島耕二、録音 神谷正和)のように、現在、改題短縮版(これは大蔵貢社長時代に三本立て興行を維持するため行われた著作権を無視した改変行為である)しか残っていない作品については、オリジナル版をより実際に即して補足することができる資料となっている。現場で使用された台本は、採録台本と同等の重要性をもっているが、通常、採録台本は台詞と音響情報のみが記録されているため、ショットサイズやショットの長さまでを記録した現場台本は、その重要性をさらに増すといえるだろう。

録音とは直接関わりはないが、斎藤寅次郎監督の『宝さがし百万両』(1954年、録音 鈴木勇)のスケジュール表を見ると、3月25日から4月16日まで、驚くことに日曜日も撮影が入り休みなしの23日間で日程が組まれており、花菱アチャコ、堺駿二、伴淳三郎ら主要登場人物14人の出演場面が一覧表で示され、効率良く撮影が進行するように配慮されていたことがわかる。

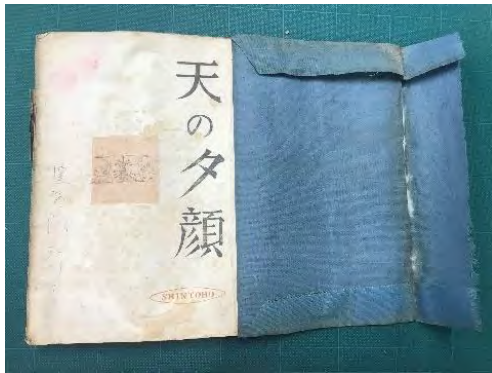
古山は1954年の『東尋坊の鬼』(監督 志村敏夫、録音 鈴木勇)を最後に新東宝から、師匠でもあった録音技師の神谷正和と共に日活に移籍し、翌年、録音技師として一本立ちした。



台本『若い仲間』
(1939年、監督 佐藤武)



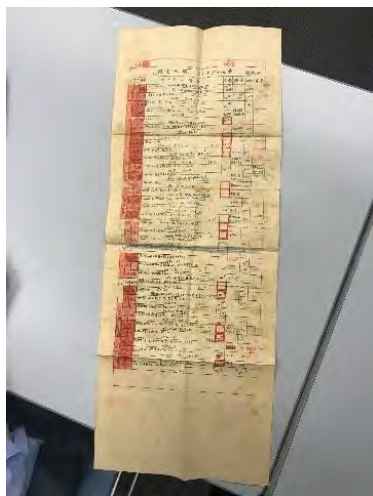
採録台本『浮世も天国』
(1947年、監督 斎藤寅次郎)



台本『天の夕顔』
(1948年、監督 阿部豊)



台本『かけ出し時代』
(1947年、監督 佐伯清、録音 鈴木勇)



アフ・ダブロール表『銀座化粧』(1951年、
監督 成瀬巳喜男、録音 神谷正和)



台本『グッドバイ』(1949年、
監督 島耕二、録音 神谷正和)

実証展示(調査に基づく資料展示)

■実施概要

名称：令和6年度国立映画アーカイブ「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」展示

「日本映画史探検！《新東宝／国際放映》と《近代映画協会》の歩み」

日時：2025年2月22日(土)～3月2日(日)10:00～19:00／料金：入場無料

会場：調布市文化会館たづくり 北ギャラリー-(〒182-0026 東京都調布市小島町2丁目33-1)

主催：国立映画アーカイブ／運営：特定非営利活動法人映像産業振興機構

提携：公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団

協力：国際放映、近代映画協会、調布市立図書館、下村健、おもちゃ映画ミュージアム、須賀川特撮アーカイブセンター、アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)、渡辺明、神戸映画資料館、インフォマージュ

■展示概要

令和6年度事業の調査結果を元にして、新東宝／国際放映と近代映画協会の歴史を様々な映画資料の展示によって紹介し、また調査関連の特撮資料や映像機材等を展示します。約15年の短い活動ながら幅広い作品群、多くの監督や俳優を世に送り出し、以降の日本映画やテレビ史に多大な影響を与えた「新東宝」と、その後継会社で数多くのテレビドラマを制作した「国際放映」、そして根源的な人間像を描いた作品や戦後の平和を訴えた社会派作品で知られる「近代映画協会」の歴史を、豊富な映画資料でたどった。またおもちゃ映画ミュージアムと須賀川特撮アーカイブセンターが所蔵する特撮関係の資料や撮影機材を展示した。さらに本事業にてデジタル化した神戸映画資料館のデジタルデータの一部を、タッチパネルディスプレイで展示した。

■展示内容

各種映画資料(展示品リスト[P.32-34]参照)及び令和6年度事業紹介(パネル／デジタル化資料の展示[タッチパネル])

■広報

VIPOではHP掲載やメール配信、プレスリリース、チラシ作成と配布、国立映画アーカイブではHP掲載やSNSによる告知を行った。

マスコミ媒体については、出版社の旅行読売のウェブ記事として、新藤兼人作品の資料を中心に取上げた記事が掲載された。

■集計データ

総来場者数：2731人※(同会場で同時開催の別展示と共通受付での集計) ※前年度比+約300名の来場者数

■アンケート結果より(一部紹介)

- ・感想として、「映画の歴史に触れられて楽しかった」、「毎回楽しみにしています」、「新東宝のコーナーがよかった」、(新東宝を知らなかった人が)「映画の勉強になりました」などがあった。
- ・具体的に言及された展示資料として、『裸の島』のモスクワ映画祭グランプリのトロフィー、新藤兼人の未映画化脚本「ヒロシマ」、特撮合成用のカメラ[35mmベル&ハウエル撮影機(1920年代)]があり、いずれも高い満足度の回答が得られた。

▶展示品(現物)リスト

※以下、各章名以外は、【 通し番号 | 資料名 | 所蔵元 】の順で記載

1-1 新東宝の誕生(1947年～1948年)		
1	雑誌「映画演劇興行新報」(1947年5月号)	国立映画アーカイブ
2	冊子「株式会社新東宝 増資趣意書」(1948年)	国立映画アーカイブ
3	雑誌「新東宝」1948年6月創刊号	国立映画アーカイブ
4	『幸福への招待』(1947年)ポスター	国立映画アーカイブ
5	『馬車物語』(1948年)ポスター	国立映画アーカイブ
6	『浮世も天国』(1947年)脚本	調布市立図書館(鈴木伸旧蔵)
7	『馬車物語』(1948年)脚本	調布市立図書館(古山恒夫旧蔵)
8	東宝・新東宝のラインナップポスター(1948年度上半期)	国立映画アーカイブ
9	『生きている画像』(1948年)ポスター	国立映画アーカイブ
10	新東宝助監督同人誌「かへる3」(1948年)	調布市立図書館(古山恒夫旧蔵)
11	『小原庄助さん』(1949年)脚本	調布市立図書館(古山恒夫旧蔵)
12	『東京のえくぼ』(1952年)脚本	調布市立図書館(鈴木伸旧蔵)
1-2 初期新東宝の理想 —プロデューサーの独立性と巨匠監督の起用—		
13	『銀座化粧』(1951年)脚本	調布市立図書館(古山恒夫旧蔵)
14	『煙突の見える場所』(1953年)ベルリン国際映画祭「ベルリン市政府特別賞」賞状	国際放映
15	『煙突の見える場所』(1953年)プレスポスター	国立映画アーカイブ
16	『西鶴一代女』(1952年)ポスター	国立映画アーカイブ
17	『宗方姉妹』(1950年)ポスター	国立映画アーカイブ
18	『女の暦』(1954年)ポスター	国立映画アーカイブ
19	永島一朗旧蔵アルバム	国立映画アーカイブ
20	永島一朗旧蔵『恋文』(1953年)アルバム	国立映画アーカイブ
21	新東宝映画リスト(1954年)	調布市立図書館(古山恒夫旧蔵)
22	『女の暦』(1954年)脚本・原稿	国立映画アーカイブ
23	小林桂樹旧蔵アルバム	国立映画アーカイブ
1-3 新東宝で活躍したスターたち		
24	『大学の武勇伝』(1956年)ポスター	下村健氏
25	『大虐殺』(1960年)ポスター	国立映画アーカイブ
26	『女奴隷船』(1960年)ポスター	国立映画アーカイブ
27	『青ヶ島の子供たち 女教師の記録』(1955年)ポスター	下村健氏
28	『決闘不動坂の大仇討』(1959年)ポスター	下村健氏
29	『人形佐七捕物帖 腰元刺青死美人』(1958年)ポスター	下村健氏
30	『将軍家光と天下の彦左』(1957年)ポスター	下村健氏
31	新聞スクラップ 丹波哲郎関連記事(「内外タイムス」、1960年3月16、17日)	国際放映
1-4 大蔵貢社長の時代(1955年12月～1960年12月)		
32	『明治天皇と日露大戦争』(1957年)ポスター	国立映画アーカイブ
33	新聞スクラップ「これからの新東宝映画」(「北海タイムス」、1955年4月2日)	国際放映
34	新聞スクラップ「活弁新入生のころ」(「東京新聞」、1956年11月3日)	国際放映
35	製作部写真アルバム	国際放映
36	新聞スクラップ「大当たり「明治天皇」」(「東京毎夕新聞」、1958年12月28日)	国際放映
37	書籍「わが芸と金と恋」(1959年、東京書房)	国立映画アーカイブ
38	新聞スクラップ「女優と社長の言い分」(「実話雑誌」、1960年10月号)	国際放映
39	『女競輪王』(1956年)ポスター	下村健氏
40	『海豹の王』(1959年)ポスター	下村健氏
41	新東宝第一撮影所航空写真(1958年)	国際放映
42	新東宝第二撮影所航空写真	国際放映
43	新東宝第一撮影所門写真	国際放映
44	新東宝第二撮影所門写真	国際放映
45	『東海道四谷怪談』(1959年)ポスター	国立映画アーカイブ
46	『地獄』(1960年)ポスター	国立映画アーカイブ

1-5 新東宝、映画製作から撤退(1961年)		
47	新聞スクラップ「新東宝、24時間ストへ」(「スポーツニッポン」、1960年9月16日)	国際放映
48	新聞スクラップ「新東宝、他社へSOS」(「内外タイムス」、1960年10月17日)	国際放映
49	新聞スクラップ「新東宝三つに分裂」(「デイリースポーツ」、1961年6月11日)	国際放映
50	新聞スクラップ「新東宝、どたん場に立つ」「新東宝、製作を一時中止?」(「中日新聞」「報知新聞」、1961年5月31日)	国際放映
51	新聞スクラップ「フジ、新東宝のフィルムを引き取る」(「東京新聞」、1961年7月8日)	国際放映
52	新東宝助監督同人誌「リアリティ」No.1(1963年12月)	国立映画アーカイブ
53	『肉体女優殺し 五人の犯罪者』(1957年)脚本	国立映画アーカイブ(山際永三旧蔵)
54	『森繁の新入社員』(1955年)脚本他	国際放映(山際永三旧蔵)
55	『狂熱の果て』(1961年)脚本	国立映画アーカイブ(山際永三旧蔵)
56	『狂熱の果て』(1961年)ポスター	国立映画アーカイブ(山際永三旧蔵)
57	『地平線がざらざらっ』(1961年)ポスター	下村健氏
追加	『流れの中で』(未映画化)原稿	白石雅彦氏所蔵(山際永三旧蔵)
追加	『海と毒薬』(未映画化)原稿等	白石雅彦氏所蔵(山際永三旧蔵)
1-6 国際放映の誕生		
58	BD『コメットさん』(1967-68年)	国際放映
59	BD『コメットさん』(1978-79年)	国際放映
60	DVD『忍者部隊月光』(1964-66年)	国際放映
61	DVD『ゼロファイター』(1969年)	国際放映
62	DVD『俺はあばれはっちゃく』(1979-80年)	国際放映
63	海外版DVD『西遊記』(1978-79年)	国際放映
64	『西遊記』(1978-79年)写真アルバム	国際放映
1-7 新東宝と香港映画-新東宝スタッフが与えた影響-		
65	『ドラゴンへの道』(1972年)ポスター	国立映画アーカイブ
66	『娘十六ジャズ祭り』(1954年)ポスター	下村健氏
67	BDジャケット『大酔侠』(1966年)	個人蔵
68	ショウ・ブラザーズ・スタジオ写真(1957年)(「穿梭光影50年 香港電影の製片與發行展覽(1947-1997)」カタログより)	個人蔵
69	福岡市総合図書館だより「ぶくぶく」(2004年)チラシ	宇田川幸洋氏
追加	胡金銓監督追悼上映 映画祭プログラム	個人蔵
追加	胡金銓監督追悼上映 チケット	個人蔵
追加	鄭佩儀氏写真	個人蔵
1-8 101年目の石井輝男		
70	『しいのみ学園』(1955年)脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
71	『石中先生行状記』(1950年)脚本	調布市立図書館(古山恒夫旧蔵)
72	『(仮題)犯人はあいつだ!』(未映画化)原稿	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
73	『(仮題)スピードに命をかける男』(未映画化)原稿	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
74	『リングの王者 栄光の世界』(1957年)脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
75	『リングの王者 栄光の世界』(1957年)ポスター	国立映画アーカイブ
76	『スーパージャイアンツ 鋼鉄の巨人』(1957年)ポスター	国立映画アーカイブ
77	『黒線地帯』(1957年)ポスター	下村健氏
78	『戦場のなでしこ』(1959年)ポスター	下村健氏
79	『女王蜂の怒り』(1958年)ポスター	下村健氏
80	『白線秘密地帯』(1958年)脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
81	『黒線地帯』(1960年)脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
82	DVD『黄線地帯』	個人蔵
83	『暁の死線』(未映画化)脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
84	『火曜日の女 喪服の訪問者 第1回』(1971年)テレビドラマ脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
85	『汚名の女 二重殺人方程式』(1981年)テレビドラマ脚本	国立映画アーカイブ(石井輝男旧蔵)
2 近代映画協会の歩み		
86	『肉体の盛装』(未映画化)脚本	近代映画協会

87	『原爆の子』(1952年)脚本	近代映画協会
88	『らくがき黒板』(1959年)脚本	近代映画協会
89	『裸の島』(1960年)脚本	近代映画協会
90	『鬼婆』(1964年)原稿	近代映画協会
91	『こころの山脈』(1966年)脚本	近代映画協会
92	『地平線』(1984年)脚本	近代映画協会
93	『サヨナラ COLOR』(2005年)脚本	近代映画協会
94	『能登の花ヨメ』(2008年)脚本	近代映画協会
95	『裸の島』(1960年)トロフィー	近代映画協会
96	『裸の島』(1960年)ポスター	国立映画アーカイブ
97	『裸の島』(1960年)ポスター(ポーランド版)	近代映画協会
98	名作フェスティバル 近代映画協会創立二十周年ポスター	国立映画アーカイブ
99	『鬼婆』(1964年)ポスター	国立映画アーカイブ
100	『家族』(1960年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
101	『おんな』(1960年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
102	『誘惑 第二話』(1970年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
103	『松本清張事件にせまる 八月十五日-終戦日の荷風と潤一郎-』(1984年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
104	『女優時代』(1988年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
105	『野菊の墓』(1993年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
106	『息子殺し』(1981年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
107	『美人デザイナー殺し』(1993年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
108	『平家伝説殺人事件』(1987年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
109	『出雲路殺人事件』(1991年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
110	『京都紫野殺人事件』(1994年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
111	『妻のしあわせ』(1989年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
112	『妻はついに浮気宣言』(1985年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
113	『妻はなぜ反乱したか』(1986年)テレビドラマ脚本	近代映画協会
114	『一枚のハガキ』(2011年)ポスター	国立映画アーカイブ
115	『一枚のハガキ』(2011年)創作ノート	近代映画協会
116	『ヒロシマ』(未映画化)脚本	近代映画協会
おもちゃ映画ミュージアム		
117	35 mmベル&ハウエル撮影機(1920年代)	おもちゃ映画ミュージアム
118	特撮画合成原画『大魔神怒る』(1966年)①	おもちゃ映画ミュージアム
119	特撮画合成原画『大魔神怒る』(1966年)②	おもちゃ映画ミュージアム
120	『大魔神怒る』(1966年)スチル	国立映画アーカイブ
須賀川特撮アーカイブセンター		
121	渡辺明作業日誌(1955-56年)	須賀川特撮アーカイブセンター(渡辺明旧蔵)
122	『獣人雪男』(1955年)絵コンテ	須賀川特撮アーカイブセンター(渡辺明旧蔵)
123	特撮セッティングメモ	須賀川特撮アーカイブセンター(渡辺明旧蔵)

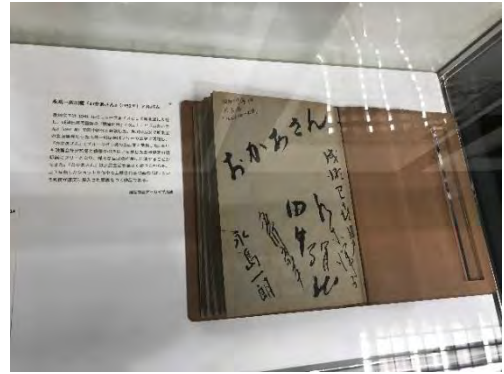
▶ デジタル展示

令和6年度事業でデジタル化した神戸映画資料館所蔵ポスターのデジタル画像28点(P.39-40に記載したリストの内、作業スケジュール都合により修復分を除いたもの)

展示の様子



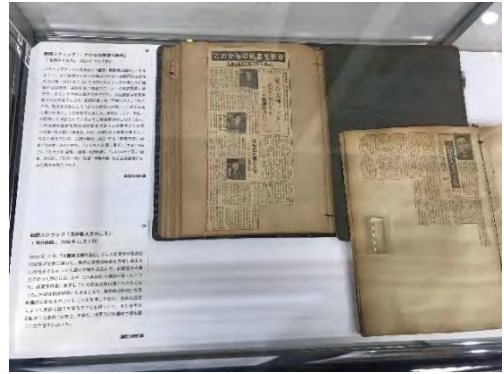
1-1 新東宝の誕生(1947年～1948年)



1-2 初期新東宝の理想 プロデューサーの独立性と巨匠監督の起用一



1-3 新東宝で活躍したスターたち



1-4 大蔵貢社長の時代(1955年12月～1960年12月)



1-5 新東宝、映画製作から撤退(1961年)



追悼・山際永三監督(1932-2024年)



1-6 国際放映の誕生



1-7 新東宝と香港映画-新東宝スタッフが与えた影響-



1-8 101年目の石井輝男



2 近代映画協会の歩み①



2 近代映画協会の歩み②



おもちゃ映画ミュージアム



須賀川特撮アーカイブセンター



デジタル展示



展示チラシ

デジタルアーカイブ実証研究(映画資料のデジタルアーカイブ化)

○平成 30 年度～令和 5 年度

■概要

本事業では、映画資料の保存と活用の推進のために、保存・修復措置、デジタルアーカイブの作成と活用を行ってきた。映画資料アーカイブにおいて、それらは喫緊の課題である。本事業を通じて実践例を重ねることで、本事業の成果が直接的に、また事例の共有によって間接的にアーカイブの推進に繋がることが期待している。以下が、過去年度の成果を一覧にしたものである。

過去年度の映画資料の収集・保存・展示方法に関する実績

年度	実施内容	協力所蔵館	詳細・補足
平成 30	1.ポスター、映画脚本に対する保存修復手当て 2.映画脚本の脱酸化処置	東映太秦映画村	1.点数=B2 ポスター3 点、映画脚本 3 点 2.点数=735 点
令和元	映画スクラップブックの保存修復手当及び電子化	松竹大谷図書館	点数=映画スクラップブック 31 冊(約 1,235 カット)
令和 2	ポスター及びプレシートのデジタルアーカイブの作成及び JFROL への搭載実験	① 東映太秦映画村・映画図書室 ② 松竹大谷図書館	①東映 70 周年記念作品、深作欣二監督、高倉健主演、岩下志麻主演作品 ②小津安二郎、木下恵介、野村芳太郎、黒澤明(『白痴』)、深作欣二監督作品 ①②合計点数=ポスター:652 点、プレシート:1212 点
令和 3	デジタル展示実施のためのデジタルアーカイブ作成	① 東映太秦映画村・映画図書室 ② 松竹大谷図書館	①甲斐莊楠音(衣裳)参加作品、中島貞夫、内田吐夢監督作品 ②野村芳太郎、大島渚、小林正樹、渋谷実、川島雄三監督作品 ①②合計点数=ポスター:324 点、プレシート:39 点
令和 4	映画脚本のデジタルアーカイブ作成	① 東映太秦映画村・映画図書室 ② 松竹大谷図書館	①田中省三氏(撮影技師)旧蔵脚本等(溝口健二監督作品関連)、田中美佐江氏(スクリーンライター)旧蔵脚本(深作欣二監督作品関連)、依田義賢脚本作品の手書き原稿 ②小津安二郎、溝口健二、黒澤明監督、その他作品の準備稿や検閲台本等 ①②合計点数=80 点

令和 5	映画資料のデジタルアーカイブ作成	① 北九州市立松永文庫 ② 木下恵介記念館	① ・戦前の下記地域の映画資料[劇場プログラム、宣材等(紙)、業務関連、ポスター] 北九州：333点／福岡：1056点 ・令和5年度展示検討用：3点 ②映画脚本：14点(木下恵介監督の書き込みがあったり、劣化進行の恐れがあったりする資料) ①②合計点数=1406点
------	------------------	--------------------------	---

現物資料の保存修復措置に始まり、映画資料のデジタル化、さらに画像データを映画資料所在地情報検索システム(JFROL)に期間限定で搭載したり、デジタル展示に活用したりすることを実践してきた。デジタル化対象資料は、ポスターやプレスシートといった宣伝資料からそれらが貼付されたスクラップブック、また国内で事例の少ない映画脚本にまで範囲を広げてきた。デジタル化のメリットは、現物資料の損傷リスクを軽減することの他に、技術的にオンライン公開・送付が可能になること、資料内容の確認の容易化、拡大して細部を確認できることなど多数ある。

■対象資料館について

過去年度においては、平成30年度～令和4年度まで東映太秦映画村・映画図書室と松竹大谷図書館にご協力をいただいていた。令和5年度事業からは、それ以外の資料館も対象に範囲を広げた。対象資料の選定においては、保存の観点から資料の劣化具合や貴重性、活用の観点から知名度や利用頻度の高さなどを考慮している。

○令和6年度の実績

■対象資料館

1.神戸映画資料館

JFROLの新規連携にもご協力いただいた同館は、約63,000点の映画資料を所蔵している。戦前作品の映画ポスターは現存数が少なく、特に同館所蔵分は他の資料館にないものが含まれており、一部は劣化の激しいものが存在する。同館は、NPO法人プラネット映画保存ネットワークによって運営されており、職員も資金も限られているため、修復・デジタル化はもとより、資料整理を進めることも苦勞する状況にある。今回一部の修復を含めて映画ポスターのデジタル化を実施することで、館内やHP等にて資料活用機会を増やすことができる。

2.木下恵介記念館

静岡県・浜松市出身の著名な映画監督である木下恵介の遺品等を所蔵している。同館は、令和5年度事業では、木下恵介のみが著作権者である映画脚本をデジタル化した。今回残りの木下恵介以外の著作権者が関わる映画脚本をデジタル化することで、令和5年度実施分と合わせて、限られた展示スペースの館内にて資料活用機会をより一層増やすことができる。

■対象資料

1.神戸映画資料館所蔵

- ・戦前作品の映画ポスター31点(内3点修復)

2.木下恵介記念館所蔵

- ・映画脚本：10点(木下恵介以外の原作者・脚本家が関係するもの)

■作業期間

2024年9月～2025年3月

■対象資料リスト

1.神戸映画資料館所蔵分

番号	主な題名	映画館名	横 (cm)	縦 (cm)	修復
1	髑髏の印籠／天馬空を駆る／大根は微笑む	映画倶楽部	78	155	○
2	己が罪／文武太平記	アサヒ館	58	100	△
3	人生の涙／村のお医(以下切れている)モダンガール(村の医者 とモダンガール)／雁の道(金看板甚九郎異聞 雁の道)	宮本座	55	150	△
4	開戦の前夜	金河座	54	76	△
5	大岡政談 阿修羅篇	△	53	77	△
6	若旦那日本晴れ(大学の若旦那・日本晴れ)／夜襲本能寺／平 五郎兄弟	明治座	53	75	△
7	天明旗本傘 後篇／愛撫 ラ・ムウル	△	53	75	△
8	藤馬は強い	△	80	106	△
9	鳴門秘帖 前篇／尊王／紫頭巾(佐平次捕物帖 新釈紫頭巾)／ 卒業と青春／運動家／裁かるゝ者	高砂座	90	104	○
10	祐天仙之助／○(欠損)の富士／猿飛と清海入道(猿飛佐助と清 海入道 中篇)／男對女／女性の悩み／恋の清水一角	高砂座	80	103	○
11	第一徴兵映画大会(プログラム：漫画＝チュウ助の報恩／演藝 ＝寄席の夕／ニュース＝耳の新聞／文化映画＝電波に聴く／ 実写＝帝都は招く／現代劇＝村の凱歌)	港座	54	76	△
12	蒲田花形軍来る！(上映作品＝愛の説教強盗／死の南極 ロア ロア／ボージェスト)	△	40	53	△
13	鼠小僧次郎吉 中篇 道中の巻／恋知る頃／三日月笹穂切り	帝国館	53	77	△
14	西遊記	△	37	54	△
15	変幻七分寶大会／天国突進	新豊座	58	105	△

番号	主な題名	映画館名	横 (cm)	縦 (cm)	修復
16	鼠小僧初草鞋		78	104	
17	漂泊の剣士／ぬかるみ小路／寂しき青春／銀蛇	松竹館	55	79	
18	朱と緑 後篇		80	105	
19	歌ふ弥次喜多／透明光線	京都宝塚劇場	53	78	
20	狼火／乃木将軍(信州墓参 乃木将軍)／寺子屋騒動記(寺小屋騒動)	同志会館	30	62	
21	黎明／踊り子となりて／幽愁	シネマ銀座	43	61	
22	朝鮮及満州事情紹介		40	52	
23	大学の歌		45	62	
24	力漕一艇身／支那鸚鵡(支那の鸚鵡)／岡惚バリー	シネマ銀座	55	117	
25	盲目の妻／街の恋人形	シネマ銀座	43	57	
26	女社長閣下		38	53	
27	春の調べ		38	51	
28	明け行く土／母の姿	福島劇場	77	155	
29	大岡政談 阿修羅姫		38	52	
30	プラーグの大学生／透明人間	阪急会館	52	76	
31	ターザンの逆襲	スケート映画館	38	113	

2.木下恵介記念館所蔵分

番号	資料名	原作者	脚本家	備考
1	『不死鳥』	川頭義郎	木下恵介	書き込みあり
2	『肖像』		黒澤明	書き込みあり
3	『破れ太鼓』		木下恵介・小林正樹	書き込みあり
4	『善魔』	岸田國士	木下恵介・野田高梧	書き込み大量、岸田國士先生と書かれている
5	『夕やけ雲』		楠田芳子	原稿用紙あり
6	『笛吹川』	深沢七郎	木下恵介	表面：城戸社長、細谷重役記名あり、表紙にコメント多数
7	『香華』①前編	有吉佐和子	木下恵介	書き込みあり
8	『香華』②後編	有吉佐和子	木下恵介	書き込みあり
9	『父よ 母よ!』<最終稿>	斎藤茂男	木下恵介	自筆
10	『父よ 母よ!』	斎藤茂男	木下恵介	名古屋弁での書き込みあり

■ デジタル化資料画像例

【神戸映画資料館】

映画ポスター【髑髏の印籠／天馬空を駆る／大根は微笑む】

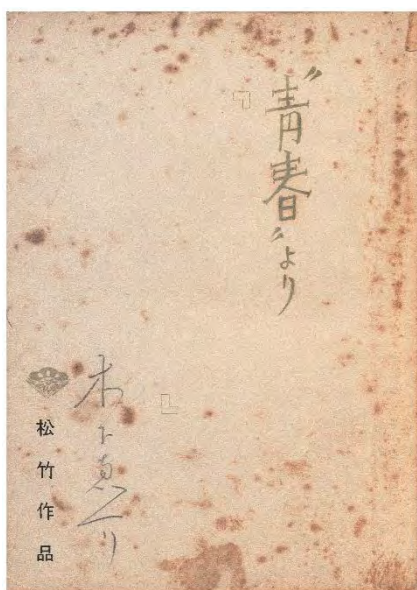


修復前

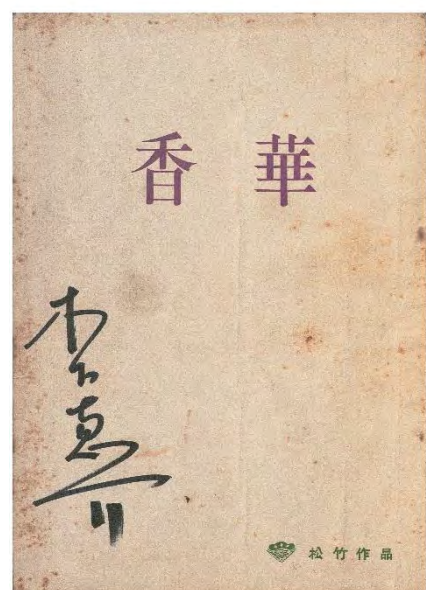


修復後・デジタル化 (350dpi)

【木下恵介記念館】



脚本『夕やけ雲』(1956年)



脚本『香華』(1964年)

映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の新規連携

■映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の概要と開発実績

研究や展示キュレーションあるいは過去の作品のリバイバルやソフト化・配信等の際の関連資料の活用等のために、各資料所蔵館に個別に問い合わせをして映画資料を探すことは労力を必要とする。どこにどんな映画資料が所蔵されているかという映画資料の所在地情報にすぐにアクセスできるようになれば、映画資料はより利用しやすくなる。近年、博物館や図書館データベースで拡大している横断検索システムのコンセプトを映画資料に用いて開発したのが映画資料所在地情報検索システム(JFROL)である。以下が、過去年度における開発実績を示した表である。

JFROL 年度別実施概要(平成 30 年度～令和 5 年度事業まで)

事業年度	実施概要	連携所蔵館	資料種別	データ 件数
平成 30	・旧・東映太秦映画村 DB の調査 ・所蔵資料のリスト化			
令和元	・松竹大谷図書館 DB と接続するための課題の整理(旧称 NFA としての実証実験) ・東映太秦映画村 DB の改修			
令和 2	・ベータ版として限定公開(連携＝計 2 館) ・サムネイル画像の搭載(限定公開期間のみ)	東映太秦映画村・映画図書室 松竹大谷図書館	計 7 種＝シナリオ、ポスター、プレス資料等、パンフレット、チラシ、スチル写真等、その他	約 7 万
令和 3	・新規連携(連携＝計 3 館)	川喜多記念映画文化財団	計 9 種＝令和 2 年度種別+図書、雑誌	約 10 万
令和 4	・新規連携(連携＝計 5 館) ・一般公開の実証実験(2023 年 1 月 19 日～3 月 31 日まで)	北九州市立松永文庫 早稲田大学演劇博物館	・計 10 種＝シナリオ、ポスター、宣材等(紙)、パンフレット/プログラム、チラシ、スチル写真等、図書、雑誌、業務関連、その他 ・資料発行年(作品製作年)による検索機能の追加	約 18 万
令和 5	・新規連携(連携＝計 6 館) ・一般公開(2024 年 7 月 4 日～)	調布市立図書館	計 10 種(＝同上)	約 23 万

上記の通り、平成 30 年度の文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業(撮影所等における非フィルム資料)」の開始当初から構想が始まり、最初に起点となった東映太秦映画村・映画図書室のデータベースの調査、令和元年度に改修した同館データベースと松竹大谷図書館の所蔵データとの連携にあたっての課題整理、そして令和 2 年度にベータ版として JFROL が誕生し、同時に両館及び東映・松竹の協力によりサムネイル画像搭載の実証実験(ベータ版・期間限定)も行った。続いて令和 3 年度に川喜多記念映画文化財団、令和 4 年度に北九州市立松永文庫と早稲田大学演劇博物館の一部のデータベースが連携し、計 5 館の所蔵データが横断検索できる状態で一般公開の実証実験を行った。それから国立映画アーカイブに事業移管した令和 5 年度の 2023 年 7 月 4 日に一般公開を実施し、同年度末に

調布市立図書館のデータベースが連携した。令和 5 年度末時点で約 23 万件の所蔵データが横断検索可能となった。

検索対象の種別については、令和 2 年度時点では、「シナリオ」、「ポスター」、「プレス資料等」、「パンフレット」、「チラシ」、「スチル写真等」、「その他」の 7 種であったが、令和 4 年度に従来の資料種別名称の一部変更と追加を行い、「シナリオ」、「ポスター」、「宣材等(紙)」、「パンフレット／プログラム」、「チラシ」、「スチル写真等」、「図書」、「雑誌」、「業務関連」、「その他」の計 10 種へと詳細な分類に再編した。これは各館の連携データの資料種別と JFROL の資料種別とのマッピング作業と同時に、図書館における日本十進分類法のような一般的分類法が確立していない映画資料の分類を、より利便性を高めて包括的な形にした結果である。各館ごとに独自に映画資料の分類を行っているが、北九州市立松永文庫においては、JFROL とのデータ連携に合わせて資料分類とその定義の見直しを図り、より適切に JFROL に反映されるようにデータの再分類を行った。また同館のデータは他の連携データとは異なり同館 HP などでは公開しておらず、JFROL との連携によってはじめて外部に一般公開された。

本システムでは、キーワード検索を行うと、検索ワードに関連した資料の資料名称、資料種別、所蔵館が一覧で表示され、各資料の詳細画面では、各所蔵元のお問い合わせ先とお問い合わせ方法が表示される。本システムにより、簡単に所在地情報を調べられることで、映画資料がより利用されやすい状態になった。

■令和 6 年度事業の実施概要

新たに 7 館目の連携館として神戸映画資料館の映画資料データ(主な資料種別＝図書、雑誌、パンフレット)を JFROL に連携させた。

■協力所蔵館施設概要

施設名 : 神戸映画資料館

所在地 : 〒653-0036 神戸市長田区腕塚町 5 丁目 5 番 1-201 アスタくにつか 1 番館北棟 2F

TEL : 078-754-8039

設立年 : 2007 年

開館時間 : 10 : 30～18 : 00

休館日 : 水・木

入館料 : 無料(上映作品の鑑賞料金は各プログラム参照)

HP : <https://kobe-eiga.net/>

その他 : 現在同館会員の特典として、閲覧図書室や閉架資料が利用可能。詳細は同館 HP を参照。

神戸映画資料館は、令和元年度の本事業にて所蔵資料の調査を実施した。同館では、映画フィルム、映画資料を収集・保存・公開している。収蔵フィルムは 2 万本(2022 年 4 月時点)以上で、国内の民間機関としては最大規模であり、また映画資料も図書、ポスター、パンフレット、機材等の大量の各種資料を収蔵している。映画資料の大半は整理中であり、図書、雑誌、パンフレットのみ目録化が進んでいる。

■実施内容

神戸映画資料館所蔵データ(主な資料種別=図書、雑誌、パンフレット)の連携

手順

1. 神戸映画資料館所蔵の「図書・雑誌」と「パンフレット」のそれぞれ異なる Excel リストの表示項目を統一させた形式の入力フォーマットを作成する。
2. 神戸映画資料館所蔵データの資料種別を JFROL に対応する形で整理して設定し、それに従って再分類する。
3. 神戸映画資料館所蔵データと JFROL の表示項目と資料種別をマッピングさせて、JFROL に反映させる。

手順詳細(上記 2、3 について)

神戸映画資料館所蔵データの資料種別は、明確に規定されていなかったため、元の資料種別名称を整理して JFROL 上の分類に対応するように設定した。その際、今回のリストにない資料種別についても、将来的な JFROL への連携を期待して予め設定した。以下が、資料種別設定に関する一例である。

○種別の設定

例えば、元データ上の同系統の資料で使用されていた「書籍」、「書籍(シリーズ)」、「文庫」、「同人誌」などは、メインの資料種別は「図書」で統一し、サブの種別として個別に詳細を入力できるフォーマットにした。

○再分類

例えば、図書と雑誌、パンフレットと映画祭カタログなどの分類基準が不確定なものは、なるべく類似資料や同じシリーズの資料分類が一貫する形で各資料を分類し直した(種別欄が空欄だった資料の種別入力を含む)。また元のリストでは、「雑誌付録」の中にポスター、ポストカードなど複数の資料種別がまとめて括られていたものを、それぞれ個別に再設定した。

神戸映画資料館の JFROL との資料種別のマッピング表と、再分類後の神戸映画資料館所蔵資料の各種別の点数は次のページの通りである(表 1、2 参照)。

表 1

マッピング表

	神戸映画資料館資料種別	JFROL 上の種別
1	図書	図書
2	雑誌	雑誌
3	台本	シナリオ
4	映画祭カタログ	パンフレット／プログラム
5	パンフレット	パンフレット／プログラム
6	映画館プログラム	パンフレット／プログラム
7	宣材等(紙)	宣材等(紙)
8	会社案内	宣材等(紙)
9	ポスター	ポスター
10	スチル	スチル写真等
11	ロビーカード	スチル写真等
12	チラシ	チラシ
13	展覧会カタログ	図書
14	視聴覚資料	その他
15	付録	雑誌
16	機材	その他
17	ポストカード	その他
18	新聞	その他
19	楽譜	その他
20	その他	その他

表 2

神戸映画資料館資料種別点数

種別	点数
雑誌	15,363
パンフレット	12,893
図書	8,344
映画祭カタログ	871
台本	520
付録	132
ポスター	66
展覧会カタログ	32
楽譜	31
視聴覚資料	16
新聞	9
その他	8
チラシ	3
宣材等(紙)	3
ポストカード	1

合計 38,292

■まとめ

令和 6 年度事業で、神戸映画資料館の映画資料データが連携したことで、全国 7 館、既存連携館のデータ追加も含めて約 27 万件の映画資料の横断検索が可能となった。

「映画資料所在地情報検索システム(JFROL)」

URL : <https://jfrol.jp/>



全国映画資料アーカイブサミット 2025

○平成 30 年度～令和 5 年度

全国の映画資料関係者(所蔵館、研究者、IP ホルダー等)のネットワーク形成を促し、望ましい映画資料アーカイブの構築に向けて議論を深めるべく、平成 30 年度の文化庁委託事業時代から「セミナー & シンポジウム」及び「全国映画資料アーカイブサミット」を開催してきた。セミナーや事例の共有、討議によって、映画資料の保存・活用・収集に係る様々な観点から映画資料アーカイブに関する活動の深化・活性化を促進してきた。以下が過去のイベントの一覧である。

「セミナー&シンポジウム」及び「全国映画資料アーカイブサミット」実施実績

種類 登壇者 年度 開催方法	報告・プレゼンテーション・発表	セミナー、トーク	セミナー(著作権 等)	シンポジウム
平成 30 年 度(第 0 回) フィジカル		「映画資料の特性を生かした修復・保存 について」 資料保存器材		「映画資料の保存・修復における今 後の展望」 株式会社東映京都スタジオ/国立映 画アーカイブ/国立新美術館/京都 大学大学院
令和元年度 (第 1 回) オンライン	「映画資料所蔵館による自館紹介」 株式会社東映京都スタジオ/松竹大谷図書館/調布 市立図書館	「保存対策と防災」 日本図書館協会資料保存委員会	「映画資料のアー カイブと公開に関 する権利の課題」 弁護士	「映画資料所蔵館の課題の共有とそ の改善」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：株式会社東映京都スタ ジオ/松竹大谷図書館/調布市立図 書館
令和 2 年度 (第 2 回) オンライン		「映画素材の制作について」 元松竹株式会社宣伝部長 「展示キュレーションについて」 川喜多記念映画文化財団 「デジタル展示について」 株式会社アイ・ティー・ワン	「映画資料のアー カイブと公開に関 する権利処理と最 新動向」 弁護士	「映画資料をめぐる現状とその課題 —全国ネットワーク化に向けて」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：東映京都スタジオ/調 布市立中央図書館/神戸映画資料館
令和 3 年度 (第 3 回) オンライン	「データベース/デジタルアーカイブの構築と活用 —映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の事例 を元に—」 事務局、国書刊行会/川喜多記念映画文化財団/東 映株式会社 「映画資料にまつわる最前線の活動発表」 映画関係の発行者に携わる個人、有志団体	「映画資料の展示(リアル/オンライン) について」 静岡文化芸術大学図書館・情報センター /国立映画アーカイブ/株式会社アイ・ ティー・ワン	「映画資料の NFT 化・デジタル活用 と著作権処理」 弁護士	「映画資料の収集・保存・活用 全 国的な連携からできること」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：東映株式会社/崑プロ /鎌倉市川喜多映画記念館/映画研 究者
令和 4 年度 (第 4 回) オンライン	「映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の新た な展開」 事務局、北九州市立松永文庫 「映画館の視点 映画館が独自に制作する広報物と 観客とのコミュニケーション」 映画館担当者	「映画宣伝デザイナーの視点 映画への 道しるべ」 映画宣伝デザイナー 「映画資料のデジタル化に関する基礎知 識 非フィルム資料(台本等)の電子化」 ナカバヤシ株式会社	「ゲーム・舞台・ 音楽など隣接分野 のアーカイブの動 向と映画資料の著 作権処理と最新潮 流」 弁護士	「映画資料を文化的リソースに—関 係者の連携強化と今後の展開」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：世田谷文学館/北九州 市立松永文庫/木下恵子記念館/北 の映像ミュージアム/京都大学大学 院
令和 5 年度 (第 5 回) オンライン	「映画資料所在地情報検索システム(JFROL)」の新 規連携 事務局 「映画資料をめぐる国立映画アーカイブの新たな取 り組み」 国立映画アーカイブ 「映画資料展—2023 年現地報告」 東映株式会社、映画史研究者、帝京大学総合博物館	「映画資料最前線—映画館文化発掘の試 み」 1.かつてそこに映画館があった-「消えた 映画館の記憶」について サイト「消えた映画館の記憶」管理人) 2.鳥取県の映画文化研究-映画資料が語る 地方の映画文化史 鳥取大学	「映画資料と著作 権—文化的活用と デジタルアーカイ ブをめぐる」 弁護士	「映画資料アーカイブと地域連携— その可能性を探る」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：小津安二郎松阪記念館 茅ヶ崎ゆかりの人物館 羽島市映画資料館 神戸映画資料館

○全国映画資料アーカイブサミット 2025

■開催概要

【日程】2025年1月24日(金)13:00～17:35

【形式】オンライン開催

映画資料に関する知識を深めるとともに、その保存・活用の円滑化や関係者・諸機関の連携強化をはかることを目的に実施。6回目の開催となる今回のサミットでは、望ましい映画資料アーカイブの構築に向けてさらに議論を深めるべく、デジタルアーカイブにおける著作権についてのセミナー、映画分野の展覧会キュレーション、特撮資料アーカイブについてのセミナーに関する発表など多様なプログラムを実施した。

■実施結果

出席者：218名

各部視聴者数：	第1部	155名
	第2部	166名
	第3部	190名
	第4部	179名
	第5部	166名
	第6部	150名

■第1部：報告

令和6年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業の実施概要について

▶登壇者

事務局 佐藤友則

事務局から令和6年度事業の概要(調査、展示、デジタルアーカイブの作成、映画資料所在地情報検索システム[JFROL]の新規連携)について説明した。

■第2部：報告

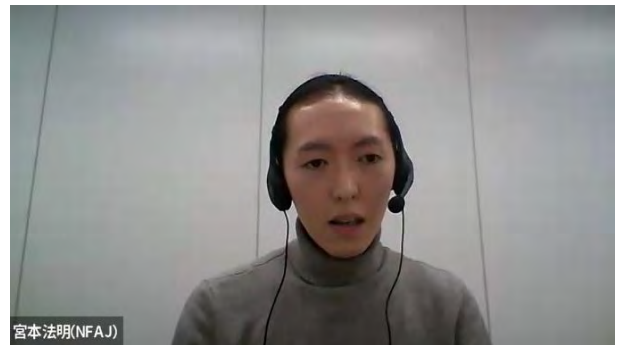
映画資料ポータルサイト「映画遺産」について

▶登壇者

宮本法明(国立映画アーカイブ研究員)

佐藤いつみ(国立映画アーカイブ研究補佐員)

国立映画アーカイブで令和5年度より運用している映画資料ポータルサイト「映画遺産—国立映画アーカイブ映画資料ポータル—」について発表した。まず同サイトの概要に始まり、検索機能(簡易検索・詳細検索・連想検索)、画像ビューアーの搭載について説明した。次に第一弾の公開資料「技術資料」、第二弾として令和6年度に新たに追加された「映画館プログラム」のそれぞれの資料の特徴やメタデータ作成において生じた困難とその対処等について発表した。最後にサイト自体の今後の課題や展望について発表した。



■第3部：セミナー

「デジタルアーカイブ構築における著作権について」

▶講師

五常総合法律事務所 パートナー弁護士

数藤雅彦

▶内容

映画資料のデジタルアーカイブ構築において留意すべき著作権等について、映画関係の事例にも詳しい数藤弁護士に講義していただいた。権利処理の総論において、著作権及び著作者人格権、展示と配信の違い、デジタルアーカイブに関する主な権利制限規定等について解説していただいた。次に、種別ごとの例として、脚本、美術図面、絵コンテ(以上、製作資料)、スチル写真、ポスター(以上、宣伝材料)について、各資料の特徴、権利者、権利保護期間、公表/非公表、その他の注意点といったポイントについて解説していただいた。最後に視聴者からの質疑応答も実施した。



■第4部：報告

「映画資料展—2023-24年現地報告」

▶登壇者

1. 特別展「映画のレシピ」(香川県立ミュージアム)

登壇者：黛 友明(同館 専門学芸員)

2. Afternote 山口市 映画館の歴史(山口情報芸術センター[YCAM])

登壇者：前原美織(同センター シネマキュレーター)

3. 世田谷文学館コレクション展「衣裳は語る——映画衣裳デザイナー・柳生悦子の仕事」(世田谷文学館)

登壇者：瀬川ゆき(同館 学芸員)

▶内容

2023-24年に開催された全国の映画資料展の中から、香川県の地域の歴史と映画史をめぐる展示、山口市の映画館の記録と記憶にまつわる展示、デジタル展示を活用した衣裳デザイン画展について、各担当者からそれぞれどのように展示準備を進めて内容を構成したかというキュレーションにまつわるお話や、展示内容の解説をしていただいた。一例としては、特別展「映画のレシピ」では、香川県初の映画上映や常設映画館、県内の配給の歴史等についてリサーチを元にした展示構成、「Afternote 山口市 映画館の歴史」では、山口市内の資料の調査や200名を超える関係者らのインタビューを敢行して制作された映像作品「Afternote」と共に資料が展示されるユニークな展示構成、世田谷文学館コレクション展「衣裳は語る——映画衣裳デザイナー・柳生悦子の仕事」では、柳生悦子の各作品の衣裳デザインによる演出意図やデザイン画について、それぞれご報告いただいた。



■第5部：セミナー

「須賀川特撮アーカイブセンター」と特撮資料の保存

▶講師

三好 寛(特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構[ATAC] 事務局長)

▶内容

特撮資料の調査、収集、保存、研究にいたるまで、各製作会社や行政と折衝しながらアーカイブ活動を推進していく ATAC の事務局長に、特撮資料(ミニチュアや図面など、特撮映像を制作する際に必要となるあらゆるもの=中間制作物)のアーカイブの経緯とその重要性(研究のためのエビデンス、美術的価値、創作へのヒント等)について解説していただいた。次に須賀川特撮アーカイブセンターの施設の特徴や所蔵資料、同館で実施している上映やワークショップの活動について解説していただき、さらに文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業による取り組みや資料の展覧会出品事例についてもお話いただき、特撮資料のアーカイブにまつわる事例共有をしていただいた。



■第6部：セミナー

「映画資料アーカイブの重要性について」

▶講師

岡田秀則(国立映画アーカイブ 主任研究員)

▶内容

7年目の本事業において、資料館や映画会社の担当者への入れ代わりによる人的問題や、配信の台頭による映画環境の大きな変化を受けて、いまいちど映画資料アーカイブの意義を確認して推進するために、「再入門！映画資料ABC」と題するセミナーを実施した。映画作品の完成までの過程では様々な制作資料(脚本、美術・衣裳デッサン、機材、小道具等)があり、映画作品の完成後は様々な宣伝材料(スチル写真、ポスター、プレスシート等)や映写機等の上映機材、記念品、興行資料等があり、また映画をめぐっては、書籍、雑誌、パンフレット等がある。これらの映画資料の特徴やアーカイブの意義、映画資料の大切さについて解説した。さらに海外の映画資料アーカイブの事例を紹介し、日本映画資料の保存状況、映画資料の活用や今後の課題等についても解説した。



第 3 章 事業総括

事業総括

2年目の挑戦

文化庁が映画資料の保存と活用の枠組み作りに乗り出し、2018年度から5年にわたって実施してきた「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」を、2023年度に国立映画アーカイブ(NFAJ)が引き継いでから2年目となった。事業運営を委託された映像産業振興機構(VIPO)がこれまで育んできた運営のノウハウと機能的な計画作りに助けられ、大枠においては文化庁時代の事業構成を踏襲しながら、種々の事業を展開することができた。昨年度の事業総括には、映画資料を使いたいと望む人が安心してそれらを活用するための知識を共有できる「地に足のついた」事業を目指すと書かれているが、本年度はそうした舵取りを多少なりとも実行できた一年だったのではないかと書かれているが、資料を含む映画保存のナショナル・センターであり、映画文化の発信地でもあるNFAJの特色はどのように現れたのだろうか。

本年度の実りー「オンライン」を見据えて

まず、横断検索システムのコンセプトをVIPOが映画資料分野に応用して開発し、連携を拡張してきたデータベース、映画資料所在地情報検索システム(JFROL)は、NFAJが運営を継承して一般公開にこぎ着けてから2年目となる本年度も充実の度を深めた。これまでの東映太秦映画村・映画図書室、松竹大谷図書館、川喜多記念映画文化財団、北九州市立松永文庫、早稲田大学演劇博物館、調布市立図書館に加え、本年度は新たに神戸映画資料館が連携し、この7館の所蔵資料がまとめて検索可能となった。同じく、NFAJが2023年度に開設した所蔵資料のオンライン公開ウェブサイト「映画遺産ー国立映画アーカイブ映画資料ポータルー」は、本年度が飛躍の年となった。戦前期の映画館プログラム5,682点のメタデータ(うち4,449点は全ページ画像のデータも)と、映画館チラシ873点を公開して本格的なデジタル・アーカイブへの指向を鮮明にしたが、JFROLとこの「映画遺産」は、映画資料のオンライン発信の拠点として早くも並び立つ存在となりつつある。

また、デジタル化に着手する余裕のなかった資料館において、所蔵品の画像データを作成することも依然として本事業の重要な一面を成す。まず神戸映画資料館の所蔵する戦前期の映画ポスターは、この時期の映画資料として非常に貴重なもので、デジタル化の対象としてうってつけであった。また浜松市の木下恵介記念館が持つ木下監督旧蔵の撮影台本も、昨年度に著作権の問題から作業を保留とした一部のシナリオについて、問題点をクリアしたうえでデジタル化を実施することができた。

本年度の実りー実資料の宇宙を泳ぐ

だが、デジタル・アーカイブ以前に、原資料そのものへの視線をおろそかにしてはならない。例年行われている映画資料の実地調査は、まず関東地区では国際放映株式会社、株式会社近代映画協会、調布市立図書館にて行われた。かつての日本映画の大手6社の一角、新東宝の継承会社である国際放映は、1961年の製作中止から60年以上を経てなお新聞スクラップや映画祭受賞品など少なからぬ一次資料を所有しており、また映画シナリオ界を長く牽引した新藤兼人監督の創造の砦であった近代映画協会も、脚本を中心とする歴史的資料を大量に保管していることが判明した。調布市立図書館では、新規に収蔵したスクリプターの鈴木伸(鈴木ノブ)の旧蔵台本と、以前から収蔵されていた録音技師の古山恒夫の旧蔵台本を調査した。

また地方調査では、福島県と京都市が本年度の調査先となった。福島県須賀川市にある須賀川特撮アーカイブセンターと円谷英二ミュージアムでは、いま資料の救出と保存、再活用の面でいちばん勢いのある特撮分野における、アーカイビングへの意欲と行政のタッグによる急速な事業展開を確認することができた。同じ調査では近隣の郡山市にも赴き、映画絵看板師だった三瓶勝吉氏のアトリエで、「一点もの」の作品である絵看板の華麗さを目の当たりにしたが、その一方でこうした大型資料の長期保存の難しさを実感する機会にもなった。

京都も、撮影所を別にしてもなお映画資料の宝庫であることがますます明らかになり、再訪の価値を強く感じさせた。京都府京都文化博物館においては、2026年に没後70年を迎える溝口健二監督に関する資料が中心的なトピックとなった。これまで黒澤明や小津安二郎の資料についてはNFAJ(フィルムセンター時代も含む)の主催展覧会に伴う調査などを通して、資料館・関係者・コレクターなどが保管するかなりの資料の所在が判明したが、溝口に関する資料群の探索はいまだ未踏の領域を大きく残しており、この調査は次年度にまたがる形で続けられるだろう。また京都では、2025年に市内での移転が予定されているおもちゃ映画ミュージアムでも調査の成果があったのは本文の通りである。本年度の調査も総じて有意義なものだったと言えよう。

そしてこれら調査に基づく実証展示は、これまでに続いて「映画のまち調布 シネマフェスティバル」の提携企画として充実した内容になったが、毎回ながら上記調査先となった各企業・団体のご厚意で多くの展示資料のご提供をいただいたことには深い感謝の念を捧げたい。主催者がNFAJとなった昨年度以来、本格的にNFAJの所蔵資料を活用できる、展示品の解説文にNFAJ研究員の執筆・監修が得られるというメリットもさることながら、運営に携わるVIPO自身のキュレーションの向上もめざましく、むしろこうした企画性の向上に見合った長い会期の実現が今後の課題になるのではないだろうか。

関心層の拡がり

そして本事業の鍵であり、《映画資料の現在》を常に浮き彫りにするイベントが「全国映画資料アーカイブサミット2025」である。オンラインイベントとして定着したことで全国各地からの参加が再び得られたが、運営上で今回最大の決断は、午後からスタートする半日のイベントに変更したことである。このサミットの内容を検討する際には映画資料をめぐる実に多くのトピックが挙がってくることから、昨年度までは終日を費やすプログラムを組んでいたが、総花的になりやすいしやや長すぎるとの意見も少なくなく、VIPOとの協議のもとで適正規模へのシェイプアップを図った次第である。中でも、これまで最後に必ず設けていたシンポジウムの枠は、例年テーマの設定に難しさがあった。というのも映画資料館、著作権者、研究者、映画ファンといった幅広い層が参加するこのイベントにおいて、参加者全体が関心を抱くトピックを定めることは難しいし、映画資料館でさえ規模や運営形態がまちまちで悩みどころが異なるという状況にも鑑みれば、ラウンドテーブル的な意見交換の場は必ずしも有効に機能しないことも多い。そこでむしろ、映画資料と向き合うさまざまな個人・団体の特徴ある取り組みにフォーカスした方が有益だと考えた。

その意味で、各地で開催された映画をめぐる展覧会を主催者が報告する第4部は、香川県・山口市・東京都世田谷区のいずれも時宜にかなった発表となり、今後も期待できるシリーズとなり、前述した特撮資料アーカイビングの勢いを感じさせる第5部とともに、このサミット全体を引き締めたように思われる。

一方で、前回の路線を踏まえて、映画資料をデジタル・アーカイブの枠内で使う際の法的な基礎知識が打ち出された第3部のセミナーは、かなり幅広い参加者の関心事を捉えていたと言えよう。映画芸術

への造詣が深い法律専門家という稀有な講師を得て、脚本・絵コンテ・美術資料・スチル写真・ポスターといった具体的な映画資料カテゴリーに沿って解説が行われたことは画期的であり、デジタル公開の実務にとって助けになる内容であった。

今回は時間短縮により参加のハードルが下がったこともあるのか、参加申し込みの増加がみられ、映画資料への関心層の広がりを感じ取ることができた。

《偏在》と《遍在》と

こうして本事業は、絶えず質的な変化を遂げながらも、映画資料をめぐる日本の状況について大きな輪郭線を少しずつ描こうとしている。それは、「映画保存のナショナル・センター」として映画資料をめぐるさまざまな情報や知識を蓄積してきた NFAJ といえども、組織本体の事業としてはなかなか前進させられない要素を、この事業が着実に担っていることを意味する。フィルムと異なり、映画資料はいわゆる「フィルムアーカイブ組織」の外にも豊富に存在するが、大きく分ければ、映画製作にかかわる資料は撮影所や映画会社、映画団体などに局所的に《偏在》しており、一方で宣伝媒体や映画館をめぐる資料などは全国各地に散らばる《遍在》の資料である。だが、映画の製作主体が十全なアーカイブを保持できるとは限らないし、アーカイブ機関もいまだ脆弱である(NFAJ も例外ではない)以上、人材や保存場所の不足をはじめとして課題は山積している。望ましい未来を語るとともに、課題の克服についても今後の議論を活性化させなければならない。

次なる 2025 年度は、2010 年度以来 5 年おきに発行してきた『全国映画資料館録』の最新バージョンの発行が予定されている。国内の映画資料の現在を総括する機会ともなるこの冊子の編集と並行する形で、積極的な事業を展開してゆきたい。

岡田秀則(国立映画アーカイブ主任研究員、展示・資料室長)

国立映画アーカイブ事業

「令和 6 年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」 報告書

発行日 : 令和 7 年 3 月 31 日
発行 : 独立行政法人国立美術館 国立映画アーカイブ
〒104-0031 東京都中央区京橋 3-7-6
編集 : 特定非営利活動法人映像産業振興機構
調査監修 : 佐崎順昭 [日本映画史研究者/国立映画アーカイブ客員研究員]、
調査結果執筆 : 佐崎順昭 [日本映画史研究者/国立映画アーカイブ客員研究員]、事務局
事業総括 : 岡田秀則 [国立映画アーカイブ主任研究員、展示・資料室長]

非売品
不許複製 禁無断転載
©国立映画アーカイブ

本報告書は、国立映画アーカイブ事業の委託業務として、特定非営利活動法人映像産業振興機構が実施した「令和 6 年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」の成果をとりまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用などには国立映画アーカイブの承認手続きが必要です。

国立映画アーカイブ事業「令和 6 年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」

委託元：独立行政法人国立美術館 国立映画アーカイブ

委託先：特定非営利活動法人映像産業振興機構

〒104-0045 東京都中央区築地 4-1-1 東劇ビル 2 階

